

快なるものはなく、高潔なるものはなく、偉大なるものはなく、而して崇敬すべきものはあらざるなり。宗教の極意即本領は、實に斯に存すと知るべし。

倫理的方面

宗教の本領は、前述の如し。然れども半知半熟の徒は之を誤り、動もすれば宗教を以て、超倫理、絶國家的のものとなし、道徳を稱し、社會を論ずるものを指して、卑と爲し、俗となし、否、或は宗教に關係なきものとなし、吾人の所謂宗教の本領のみに局して、自ら高しと誇るに至る。於此乎吾人は倫理的方面を説かざるべからず。見よ宗教の本領にのみ局する者は、必ず此倫理の方面に缺陷を生ず。夫れ倫理は練達を意味す、而して練達は世上の間に奮闘し、徳義の實行に努力するものにあらずんば能はず、彼れ祈禱三昧にの

み其身を委ね、一個の發悟にのみ其心を悦ばせて得々たるものは、思想高くして意志弱く、靈覺空しく山谷に湧くも、嘗て田園に及ぶなし。こゝを以て吾人は宗教本領如何を認識すると同時に、更に倫理の方面に盡竭し、人と國との間に處して、光鹽たるべく、抵柱たるべく、將た木鐸たるべき使命を果さざるべからず。

學術的方面

學術的方面の宗教は、近時大動搖を來し、從來の神學は、殆んど根柢より覆へり。こゝを以て今や學術的方面の宗教は、空しく冷笑の中に葬られんとす。然れども是れ一時の現象のみ、必ずや早晚捲土重來の勇を鼓し來るや知るべきなり。宗教本領が靈的經驗に存し、其倫理が努力に在りや前述の如し。然れども吾人は更に茲に學術的方面の研究を要す、若夫れ之れ微らんか、眞理を主張する宗教に

して、往々牽強の言、附會の説を唱へて、憫れむべき欺己欺他の迷者となり、終に世を毒し、國を破るに至るもの、比々皆以て然らんとす、天主教是れなり、希臘教是れなり、回教是れなり、而して今や基督教の正統派なるもの、亦た將に然らんとす、豈寒心に堪ゆべけんや。是故に吾人は彼の實事を實事と爲し、眞理を眞理と爲して憚からざる學術の方面をも歓迎し、學術は決して宗教の敵にあらず、却て宗教を滌潔すべき益友たることを確信し、更に此方面に我が意を用ゐざるべからず。

文藝的方面

今や文藝的宗教を唱道するもの、日に益々多からんとす、是れ最も歓迎すべきものに屬す。從來の宗教は専ら理窟にのみ依りて立てり、而して今や其の理窟の立つべからざるを見るや、更に文藝の方

面に一生面を開き來らんとす。鳥の啼き、蝶の舞ふ其間何の理窟やある、花の開き、月の照る、其間何の説明やある、而かも之を見之を聞き、之に觸るゝものは、一種の靈覺に襲はれざるを得ず、此靈覺果して是れ何物ぞ、眞か偽か、實か虚か、我れ之を辯ずる能はず、而かも我れの之を自覺するや、猶ほ我れの存在を自覺する如く其れ然るなり。かの文と云ひ、詩と云ひ、藝と云ひ、術と云ふも、詮するところは、皆此の自覺的範圍に屬す、而して宗教の覺悟も亦た其中に存すとせば、文藝たるものは、正に廣き意味に於ける宗教の一部と見做すべきものに非ずや。左ば吾人は飽までも此方面に發展し來れる宗教の活動を歓迎せざるべからず。尤も其の弊害より之を観るときは、此文藝的方面に屬する宗教家は、單に宗教を美術視し去り、更に進んで其美術の源頭に達することを知らず、宗教本部を小乘視し、倫理的方面を無視し、人類の活劇を演藝視し、而して

哀れなる弱き感情一遍の人となりて終らんとす、是れ最も警すべき事に屬す。

完成的宗教

吁、井蛙は大海を知らず、小人物は各方面を觀る能はず、各々獨尊的見地に陥り、終に一種の不具的宗教家たるもの、所在皆是れならんとす。左れば我黨は周圍に鑑みこゝに完成的宗教家の資格を具へざるべからず。其本領に入るときは、天地なく、人類なく、生なく死なく、空間なく、時間なく只だ我と神あるのみ、の自覺に到着し、而して宇宙大の神魂を養ひ來る者となり、其倫理方面に入るときには、肉を撃て之を服せしめ、義を聞て起ち、人と國との爲めに、形骸を擲て悔いず、其學術的方面に向ふときには、只だ眞維れ求め、只だ實維れ重んじ、たとひ古聖賢の唱ふるところ、偉人豪傑の奉じ

たるどころたることも、千載の下に之を擊破し去り、こゝに不朽の大道を樹立し、其文藝の方面に來るときには、蝶と共に舞ひ、花と共に笑ひ、更に人情の機微に觸るれば、鐘聲に哀を催し、花色に悲を起し、暗室に光を放ち、喪心者に希望を與へ、而して遂に放蕩子をして其慈父の許に歸來せしむる者とならざるべからず。吾人は完全を人に期するものにあらず、然れども各々自ら戒愼して、かの醜き不具的見地の人たることなく、互に長處を認めつゝ、共に與に相携へて、完成的宗教の大天地に活躍せしめよ。是れ吾人の理想的所望なり。

現世と來世との相違

現世と來世とに、如何ほどの相違があらうか、勿論非常な相違であらうが、直ぐに解ることが出来る。即ち現世には、人の價値を其持物と共に判断するのであるが、已に此世を離れて彼の世に行くときには、一切其等の持物を携帶して行くことが出来ず、價値は唯だ其人格に存するものとなるのであるから、之を想像することは難くない。

先づ身體の方面より謂ふべし、身體も持物の内であるが、現世では梅ヶ谷や常陸山が大威張りに威張つて居るが、來世では什麼云ふ小さいものになつて居るかも知らぬ。彼れ楠公や藤樹などは小男であつたが、其人格に應じて大くなつて居るものとすれば、彼の常陸山や梅ヶ谷であるであらう。小野の町やクレオパトラは絶世の美人であつた、然し其れは現世の事で、其人格に應じて醜美を分つ彼の世に在ては、頗る醜婦になつて居るかも知れぬ、而して現世では人の見向きもせざりし醜婦が其人格の立派なりしが爲めに、非常なる美人となつて居るであらう。更に病身者や、不具者に就ても同じ事で、若し其病身や不具でありしが爲めに、此世で一層修養を勵みたごすれば、彼の世では、立派なものとなつて居るであらう、其他此世で強かりしものが、彼世で弱くなり、此世で肥へて居たものが、彼の世で瘦たものとなつて居るであらう。勿論靈魂には、此肉體の

如き變化がないであらう、然し其人格の相違よりして、必ず大小、強弱、肥瘦、醜美の區別がつくに相違ないから、随分變化するであらうよ。

次に財産の方面より觀察すべし、三井岩崎などは、實に現世に於ける大關である、然し其大關であるゆえんは、人格が勝れて居ると謂ふ譯ではない、靈魂が富んで居ると謂ふ次第でもなく、唯だ金と云ふ持物の爲めに、威張ることが出来るのである。然るに彼の世までは、此持物を携へて行く譯にゆかず、一度此世を去れば、貧民窟の連中と同行であつて、其間些少の相違のないのであるから、實にお氣の毒な有様であるであらう。否、此れは來世を待つまでもなく、此世に於ても、若しも不仕合が打續くか、若くは大失敗の爲めに、大家が落魄した曉には、誰れあつて尊敬するものゝなきに至ると同じ事で、富豪家の威張れるのは、其人格の上ではなく、其持物の爲

めと思へば、其持物の無くなつた時が、想像せらるゝではないか。次には勳爵を謂ふべし、爵位も亦た持物である。伊藤公も今は其勳爵の頼むに足らぬを啣たれて居るであらう。尤も伊藤公の如きは、青年時代より其身を國家に捧げ、君に事へて能く其身を致し、親に事へても能く其心を竭したる方であるから、來世に於ても、人格上決してソナナ下には居まい、然し随分風俗を濫したるところや、虚榮に驅られたるところなごもあつたから、現世に於ける如く、大勳爵の爲めに其威を振ふと云ふ譯には行きませぬまい。左らば伊藤公に及ばざる其他の勳爵家は、勿論の事、更に其勳爵家の子弟諸君の如きも、若夫來世に至らば、貴公子たる幅を利かす譯にも行かず、馬車に乗つて往來する譯にも行かず、唯だ此世に於て磨き上げた人格より外、別に我身を扶くるものがないのであるから、此世に居た時に品性の修養を怠りしことを悔むであらうよ。基督教徒は曰ふ、

基督を信せざるものは滅亡に行き、之を信するものは天國に行くべしと、佛者は云ふ、阿彌陀の本願に絶るものは極樂往生を遂げ、之に絶らざるものは、地獄に落つべしと、而かも地獄とは何ぞ天國とは何ぞ、基督教も佛教も皆口を揃へて説て謂ふ。天國は汝の裏に在り地獄は汝の心に在りと、左れば救はるゝとは、己れの精神状態を謂ふのであつて、別に天使と翔翔するのでもなく、又た血池火山に赴くでもない、而して精神状態とは、取も直さず、人格如何を指すのであるから宗教の極意は、畢竟此人格を養成するより外にはない譯である。

然らば諸君、現世と來世との相違が解りましたか、持物と自我との區別が分りましたか、而して人生の眞價は自我に在つて持物に在らざることが解りましたか、若し之れが解りましたならば、今より不朽不滅の人格を養ふことに着眼せねばなりません、天に寶を積

むことを心掛けねばなりません、而して猥りに附屬物を擁して驕態を極むることを、無此上恥辱と感せねばなりません、常陸山を始め、三井岩崎、其他勳爵士諸君以て如何と爲す。

宗教の人

宗教の人は、大説教を爲す人にもあらず、議論縦横に證據論を組織する人にもあらず、舊神學に泥着する人にもあらず、將た新神學を稱へて、意氣昂然たる當世の進歩的才學者にもあらざるなり。

さす」と。列子は一時怪を行ふものに迷へり、然れども其先師壺子が、遂に枯木を示し、陽春を示し、波動を示して、之を教ふるや、始めて大道に入りて前非を悔いぬ。吾人は心象會を起し、心霊的現象を研究し、大に此方面に於ける未發の秘義を聞かんと欲す、然れども彼れ隠を素し、怪を行ふものと並視する勿れ、若くは名利の爲めに奇蹟を賣る似非豫言者と混同する勿れ、見よ我が心象會の會員は、いづれも眞面目の研究者にして、其間博士あり、學士あり、宗教家あり、いづれも世間知名の士たるを失はず、以て此會が猥りに怪力亂神を語るものにあらざるを知るべし。若夫れ彼れ迷信家が、何んの學識もなく、何んの人格もなくして、猥りに此等の心象を弄ば、否、此等の心象に弄ばるゝことあらば、是れ我等の素志に非ざるなり、我等はごこまでも正道に據るものにして奇道に據るものにあらず、愛の神、義の神を信じ、天道と人道とを守り、公明正大なる人

我が道友

格を養ふを以て、我宗教の本尊と爲すものなり、而して彼の奇蹟を行ふ如きは愛心より出づる餘徳のみ。唯だ彼れ物質界の現象と法則とが、今日到る處に研究せらるゝにも拘はらず、心霊界の現象と法則とに到りては、未だ世に研究せらるゝもの多からざるを以て、之れを天下に鼓吹せんと欲するのみ。

我道友に選ばれたるもの、數十人あり、而して其間には博士あり、

學士あり、著者あり、記者あり、牧師あり、教授あり、政治家あり、
 實業家あり、更に意志の豪宕なるものあり、才華の潑々たるものあ
 り、技能の見るべきものあり、靈的經驗に富むものあり、然れども
 吾人の選びたるは、其等の點に據るにはあらで、第一に問ひたるは、
 「善い心の人」たるや否やに在りき。見よ、我道友には一人として、邪
 念惡意の人はあらざるなり、其信仰より云は、佛敎的あり、儒敎
 的あり、哲學的あり、新神學派あり、舊神學派あるも、一人として
 「善い心の人」たるに落第するものはあらざるなり。彼れ宗敎家と稱す
 るも、其間友を陷るものあり、師を賣るものあり、權勢にこがる
 るものあり、虛榮心にみつるものあり、常に百物を己のが爲めに利
 用せんと狙ふものあり、腹の黒き人あり、涙の無き人あり、輕薄才
 子あり。此等は宗敎家と稱ふるも、其實は天國を去ること遠きもの
 なり、我黨は之を取らず。

日本教會の覺悟

微々として振はざる間は、世上に何等の反響をも惹起せざるべし。
 然れども少しく氣勢を高め始むるに於ては、四面皆敵たるべしと覺
 悟せざるべからず。或は信者泥棒と呼ぶもあらん。或は教會荒しと
 叫ぶもあらん。或は曖昧派と語り、容寬即無主義派と誇り、折衷に
 巧妙なる才子と説き、總的宗敎製造者と評し、パリサイもサドカイ
 も皆相率ひて我れに向はんや必ず、而かも懼るゝ勿れ、我れは不朽

天地人
の道即ち唯だ簡易明白なる道を説いて進まんのみ。此道たるや、耶蘇
が悔改めて天父に歸り、己を清めて人を愛し、其極天國の人たれよ
と教へたると同じく、我日本教會の主張する、「神と養徳と愛隣と永
生」の四信仰即ち是れのみ。此れ果して曖昧なるか、折衷なるか、
矯的なるか、無主義なるか、彼れ煩瑣の神學を擁して、耶蘇の單純
教を異端視し、終に彼れを十字架の上に釘したるもの、今や夫れ何れ
に在る。吾人は耶蘇と俱に「我れ己に世に勝てり」と謂はんと欲す、然
れども更に又耶蘇の言に顧み、狼群に投じて、奮闘するの覺悟あら
ざるべからず。

サタンよ退け

一日サタン來り告げて曰く、汝は不朽の道を主張して、こゝに一
宗教を樹てんと議す、天晴なる心掛と謂ふべし。然れども敢て問ふ、
汝の之を企つるは何の爲めぞ。名の爲めか、汝は謂ふ「智巧神聖の人」
吾れ既に脱すと、名の爲めにあらざるべし。然則利の爲めか、汝は
天幕を織りつゝ、傳道す、其利の爲ならざるや知るべきなり。然則
國家人類の爲めなるか、國家人類の爲めに盡す、焉ぞひとり宗教に

天地人

限らん。社會教育、是れ汝が天下に唱道し始めたるもの、若夫れ此方面に向はんか、汝の演説に聴者を惹き、汝の著書に購讀者を得ること宗教事業に於ける類にはあらざるべし。汝の長處は此に在りて彼れにあらず。又た聞く、汝は嘗て歴史を研究し、其結果として「萬國史大全」を著述し了はるや、恰も日露戦役の直後なりしを以て、此際大に政治智識を我國民間に普及せしめ、我國家をして其歴史に主張したる如く、國民的國家たらしめざるべからずと發憤し、先づ政治家にてはピットを狙ひ、社會改革家としてはウイックリフを睨み、將に大に社會に活動せんと欲するの志望を起したることありしとかや。是れ寧ろ汝の得意たるもの、宗教の如きは汝の柄にあらざるべし。汝今や一宗教を樹立せんことす、其大膽や欽すべし、而かも其最も努力を要すべき創業の時に當りて汝は空しく職工たり、資なく、時なく、而して保羅の如き力量なし、己れを知らざるも太甚し。

汝或は信ず、兎角する中に、有志の來りて、大に汝に助力するものあるべしと、而かも是れ全く空望のみ。或は協力すべしと謂ひ、或は投財すべしと謂ふ、而かも實行の期に至らば、空嘯いて其任を他に嫁するもの、滔々たる世上皆是れなり。汝の希望は水上に文字を畫するよりも果敢なしぞかし。止みなん止みなん。若夫れ予にして汝ならんか、己に名利を脱却してデヴィネターの堂奥に入りたるもの、復た世の紛々者こと事を謀ることを好まざるなり。若夫れ予をして汝の爲めに圖らしむれば、曾に一宗教を起す如き大望を廢するのみならず、其得意たる社會教育の事業も、國民指導の運動も、一切之を思ひ止り、獨り光風霽月の野に退き、一生を随意の著書と演説とに任せ、書かんと欲すれば則ち書き、語らんと欲すれば則ち語り、蒼蠅き、汚なき、油凝き人類を去り、遠く天と連り、廣く自然に親しみ、所謂る神をデヴィネターの間に遊ばせて樂まん哉。然而して

若夫れ國家人類の爲めに忍ぶ能はざる心起らば、則ち自問自悟すべし。今日の如き日本に於ては、到底何事をも成す能はず、一切の事業には賛助者を要す、而して賛助者を得るの方法は、泥を瀝して波を揚げ、糟を舗て醜を翫り、巧みに筋を傳ひ、甘く人を操るに在り、而かも、是れ予の能くするところにあらず、然則苦心の結果畢に失敗に終らんよりは、寧ろ隨意の著書と演説若くは説教に満足し、却て効果を收むるに如かず。夫れ大業は時勢を知り、更に己れを知るに始る、君何んぞこゝに明なきやと。

或は揚げ或は抑げ、或は嚇し、或は慰め、我れの好むところを察し、我れの憂るところを知り、機鋒百出當るべからざる概ありき、而かも予は靜聽の後、襟を正して答へて曰く、サタンよ退け、予は神を信するものなり。

我「道友」の宗教觀

我道友の宗教觀は、前後十七名に及ぶ(此は道雜誌に載せたるもの)、而して其觀るところ皆同じからざるが如し。則ち同じからざるが如しと雖も、其の何物か一大靈物を認め、之れに合することを勉め、之れに合することを樂しむを以て、宗教の極意と爲すに於ては、恰も符節を合するが如くに一致する者の如し。戸川君の眞如説も、捕捉すべからざる如くして、矢張り此れなり。野口君の「靜かに睡れる愛兒」木の

間洩る月の一喝も矢張此れなり。三宅君が我が宗教觀を求むるに應じて、我が『星』の演説にて足れりと爲し、無限の空間に横はる幾萬億の辰星と其廣大無邊なる不可思議物を説き、古昔に認めたる如き小き神を排し、よろしく此天體を觀るべしと喝破するところも、矢張り此れなり。吾人は諸名士の宗教觀を徴し來り、其遂に一に歸したるを悦ばずんばあらず。又た之を説くに理窟を以てせず、多くは實驗的心情を以てせられたるを見て、今日に興り來れる宗教觀の傾向をトすべしと爲すものなり。

ソクラテス教

ソクラテス教も亦た實踐躬行の宗旨である。當時詭辯家が道徳を無視し、眞理の存在を否定して、只だ詭辯にのみ耽けるを見て、ソクラテスは發憤措かず、然らば一ツ道徳の有難きを見せしめんと、徳行を以て人を感化し始めたのが、抑々ソクラテス教の起原である。故に其教訓を聴くときには、孔子の論語や耶蘇の山上の説教を聴くと同じの感がある。其れよりソクラテスは段々と道の本源に溯りて遂に儒教の所謂天、基督教の所謂神を認め、其信仰の向上する

や、耶蘇と同じく此神と言へり、而してソクラテスの説きたる「デーモン」は即ち基督教の聖靈に異なることなし、耶蘇はソクラテスの教を知らざりしもの、如し、然し若しも之を知り居たりとせば、耶蘇はソクラテスの後に生れた弟子である。

正統派の罪惡

吾人は敢て人を攻撃せざらんことを期す。人の攻撃に向ふては、之に辯明を與ふべき義務あるを信すと雖ども、我れより人を攻撃せ

ざらんと欲するものなり。然れども近時遺憾に堪へざるもの多きを見聞す。乃ち正統派に向ふて、少しく猛省を促さざるを得ず。一紳士あり、數年以前より、或る正統派の雜誌を讀み、若くは其説教を聴き、固く之を信じて喜び居たりき。然るに近時我が雜誌「道」或は「不朽の道」を閲し來るや、忽ち其信仰に動搖を來し、今まで馬鹿を見たる如くに感じ始め、終に其信仰を喪ふに至れり。尤も其後或達見者の説明に會ひ、遂に易らざる真理、即ち動ざる宗教の神隨を悟得するに至りしとは云へ、一時は雜誌「道」と「不朽の道」の爲に礙きて非常なる失望落膽に沈みたることありと聞く。於此乎正統派は吾人を以て、人を礙すものと罵るべし。然れども吾人より之を視れば、正統派こそ人を礙すの罪惡を犯すものなれと謂はんことを欲す。吾人が繰り返し又た繰返して述ぶるが如く、かれアダム、エバより起れる原罪説の如き、保羅の贖罪論の如き、基督の奇蹟的降誕の如きは、已

に業に學術上若くは歴史上より否認せられたるものとす、否、否認せられざるまでも、目下疑問と研究中に屬するものとす、而かも今日の聖書を其儘に用ゆるときには勢ひ之を確定の眞理なりと説かざるを得ず。或宗派の如きは、自由説を採用するを以て、耶蘇の直傳ならざる保羅の教書を講じ、矛盾多き福音書の記事を説くも、極めて抜粹的に出で、漸く詐僞罪を犯すを免れ居ると雖も、寔に苦しき、否、不健全なる態度と謂はざるを得ず。吾人は彼の知らずして割禮を説くものを警め、彼等の熱心なるは、予れ之を證す、されど智識に由るにあらず」と述べたる保羅を追想して、轉た同情の念に堪えざらんことす。又た既に廢れたる神學を固守し、保羅の説破に會ふて漸く閉口せしも、尙且つ「勒り殺したるものを食ふべからず」との條目を加へよと主張したる彼れ猶太的信者を憐れまざる能はず。然ども今日は知らずして罪を犯すものゝみにあらず、己に之を知りつゝも、

尙且つ斷然たる宣言に出づる能はず、從て詐僞と知りつゝ、尙之を人に説き、其極管に詐僞罪を犯すのみならず、畢竟廢の種を蒔くに至る。吾人は猶太教者を始めヤコブの徒までが、どこまでも舊教を維持せんと欲して、終に大失望大落膽に陥りし悲境を追懐し、更に今日の兄弟に同情を表す。然れども之に同情を表すれば、表するは、彼等の猛省を促すの情の益々切ならざるを得ざるものあり。嗟、吁我が兄弟よ、其熱心や欽すべきも、智識なき徒となる勿れ、其情や察すべきも、詐僞を説くの人となる勿れ、冀くは、末の世に至りて、神の示し給へる新福音に従ひ、速かに割禮的民族の虚儀を擲ち、宇内的宗教の人たるべし、正統派は稱す、吾人の主張は人を礙すと、而かも吾人は彼れ正統派の人を礙すの太甚しきを見て遺憾の情に堪へざるものあり。識者は謂はん、此論舊しど。然らず。目下に於ける我國基督教全體の現状は、今猶ほ舊の如く、方に此論を要すべき

天地人
時なりと知るべし。

回教

これは勿論基督教の一派と稱しても差支ないのである。唯だマホメットがアレキサンデル派若くはネストリアン派の連中より、基督教を聴しが故に、奇蹟的行爲を重んぜず。耶蘇の奇蹟降誕を信せず、唯だ耶蘇を大豫言者と爲し、己れを耶蘇と同位に置き、予れは耶蘇より後に生れて、更に新しき啓示を神より得たりと謂ふに在り。其基督教と似たるものあるや勿論なり。過般土耳其の士官にしてフア

ドレいと云へる人予を訪へり、而して曰く君の唱ふる日本教會の主張たるや回教に同じ、君の教會にては、耶蘇の奇蹟降誕を信せず、彼れを豫言者と爲すも妨げずと曰ふ、然らば是れ基督教にあらず回教なり、請ふ共に其歩を同ふせんと。予の曰く然り予は喜んで君を日本教會に迎ふべし、但し豚食、飲酒、洗手の類は、單に個人の信仰に任せおき、之を他人に強ゆる勿れど。於此乎彼れは滔々雄辯を振て、豚食飲酒の非を陳べ、是非とも洗手等の諸禮を守らざるべからずと論じたるや可笑しかりき。然どもフアドレー氏の言の如く、已に耶蘇の奇蹟降誕と其贖罪説とを信せざるも可なりとせば、回教との差は、其外形上のみ存するものとなつたのである。以上は諸教と基督教との比較である、如何に歸着するところが同一であるかが分るであらう。道は一なり、唯だ其見様によりて異なるのみ。眞理は一なり、唯だ其問ふべき問題と撰ぶべき條件は、何れの宗教

天地人
が最も實際に解り易く、最も實際に人の靈魂を救ひ、最も實際に世の人心を教化し得るや否やに在るのみ。

— 社 會 —

迷信の復興

池上本門寺の御會式には、本年未曾有の參詣人を惹きぬ。更に神田明神の賑ひと云ひ、氷川神社の祭禮と云ひ、近來益々盛況を呈するの傾向あり。殊に頃日發掘せられたる神奈川在の「お穴様」へは、日幾萬の人を出し、京濱電鐵も新橋鐵道も、一時之れが爲にいづれも特別の廣告看板を掲ぐるに至りぬ。是れ何故に然るか、彼等の多數は迷信者たるに相違なし、而かも其迷信たるや、バスカルの所謂

天地人

る笑て去るべき類にあらす、彼等は維新の革命と俱に一時拜すべきものを喪へり、而かも彼等の宗教心は、到底無神無佛にて満足する能はず、今や拜すべきものを求めて彷徨ひつゝあるなり。基督の所謂牧ふものなき羊とは、彼等を謂ふなり。吾人は此國民の憫状と之を養ふべき活宗教の存在せざるを想ふ毎に、國家の前途に向て寒心せざらんと欲するも能はざるなり。世の心なきものには、一場の笑談となりて了はるべきも、心あるものには沈痛の憂慮を與へずんばあらず。吾人の責任や大なりと謂ふべし。

一少女提督と感泣せしむ

スベリ—提督、花馬車に乗じて、横濱街頭に入る。沿道の兒童萬歳を大呼し、花束を投すること雨の如く、歓迎の赤心を露出し盡して遺憾なし。提督も最初のほどは、静に黙して其歓迎を受け居りしが、遂に可愛ゆき一少女が、提督萬歳と、一聲高く叫びながら、歩を進めて其手に把てる美はしき花束を其馬車中に投げ込み、之れが其の膝上に落ち來るや、滿眼に感涙を湛へたりしと云ふ。實にや至誠は神の如し。

米艦隊歓迎

米艦は我れを威嚇せんとして來り、我れは之れを歓迎して萬歳を唱ふ、實に天下の奇觀と謂ふべし。然而して米艦の我れに來るや、我れの歡迎に會ふて敵意頓に消散せり。且つ我れの彼れを迎ふるも、當初は外交的のつもりなりしも、いつしか眞實的に轉化し來り、肝膽相照したる趣きあり、人生由來意氣に感ず、更に天下の奇觀たり。

自然主義の害毒

自然主義を以て、既に過ぎ去りたる流行物となす勿れ、其の論評は既に陳腐に屬したるも、其害毒は今や漸く熾ならんとす。頃日青年あり、大膽にも予に向ふて揚言して曰く人は、道德と云へる繩を作りにて、自己を束縛し、之が爲めに自ら苦しむ、習慣の然らしむる所とは謂へ、笑ふべきの極なり、自然に任せて逍遙すべし、飲まんと欲すれば則ち飲むべし、食はんと欲すれば則ち食ふべし、婦女を見

て色情を起す、何ぞ之を姦淫と謂はんや、聖人起りて人に苦痛の種を蒔けり、宗教を聴く勿れ、道徳を信する勿れ、是れ皆虚偽の作物なり、汝の意のまゝに行動せよ、人生の快樂此の間にのみ存す、是れ我が近來の悟道にて候と。嗟呼悲哉滔々たる青年今や自然主義の害毒にかゝり、直ちに來るべき悲哀の結果を知らざらんとす。聖書に曰く汝今笑ふものは禍なる哉、泣かんとすればなりと。由來無智と無徳とは同一のものぞ知るべし。

國家の亡徵

自然主義は雷に一個人に禍するのみならず、其流行はやがて、國家の亡徵を意味す。佛國革命前に當りて、此の自然主義の流行を見たり、普國が那翁に蹂躪せらる當時にも、亦此の自然主義の流行を見たり。日本の今日ある、果して是れ何の兆ぞ。史に熟するものは、

今や悚然として毛髮の樹立するあるを禁する能はず。中庸に曰く、國家將に亡びんとす、必ず妖蕪ありと。是れ即ち妖蕪なることなからんや。

明治四十三年を送る

明治四十三年亦た將に逝んとす。請ふ、予をして我が過去五十年の一生を回顧せしめよ。

乃ち予は今こゝに、予が過去五十年の一生を三段に分ち、生後十

歳までを動物性時代と稱し、十歳より廿歳までを功名心時代と稱し、廿歳より五十歳の今日に至るまでを宗教的時代と稱し、少しく述べるところあらんと欲す。

予は維新豪傑の如き回天動地の實歴談を有せず、又天稗棒を擔ふて自働車に飛び乗りたる富豪家諸君の如き成功談を持せず。汲々兀々、貧態交至、憐れむべきものあるも、誇るべきものなし。然れども若夫れ琪樹連雲の下、獨り細菊の荆扉に近きを見れば、亦た一入の風物なるべし。

動物性時代 我身の何處より來り、又た何處へ行くべきかをも知らず、茫々漠々、飢へば食ひ、渴すれば飲み、疲るれば眠り、醒めば動き、喜べば笑ひ、悲しめば泣く、無我夢中の間に月日を送る、是れ生後十歳までの生涯にあらずや。顧みれば予は此際何物を求めたるか、將た何事を念じたるか、求めたるものは遊戯のみ、而して

念じたるものは唯だ其手段のみ。春は東風に紙鳶を飛ばし、夏は炎天に蜻蛉を追ひ、秋は枯木に蝸蟬を黏し、冬は雪庭に達摩を轉す。其天真や愛すべく、其情や掬すべきも、是れ畢竟狗兒の類のみ。予れ故に此間を名けて動物性時代と謂ふ。

功名心時代 十一歳の冬、嚴父子を其膝下に召して曰く、汝將來何物たらんと欲するや、我れは汝を以て大學者たらしめんと欲す、是れ我が日夜汝を督勵して、敢て一刻も學事を怠らしめざるゆえんとす、今や藩老の東都に赴き、將に安井息軒の家塾に入らんとするあり、汝之れが茶童となり、行て以て我が斯の志を達せん哉と、於此乎蹶然起て立志の途に上ぼることとなりぬ。是れ予が動物性時代より、一轉して功名心時代に入りたる源頭とす。

爾來予は東漂西泊の生涯を送りぬ。苦勞を重ねぬ、辛酸を嘗めぬ。雪夜拾樽の身ともなりぬ、階下控陣の人ともなりぬ、幾度か小成に

安んせんと欲するの情氣をも起しぬ。然れども一たび立志の初念に想到するときは、血湧き肉躍り、山河の艱難何物ぞ、人心の反覆何物ぞ、男子世に生る、豈碌々として死すべけんやと、奮勵一番更に風濤の間に突入するの勇氣を起しぬ。予は當時慨世の氣を吐きぬ、憂國の談を好みぬ。更に又た彼れ姦商が豪奢に傲り、此れ良民が飢寒に泣くを見る毎に、血眼睨視、嗟呼斯社會を奈何にせんと、憤惋の拳を固めたることもありき。然れども主とするところは、我が一身の功名利達を念するより外あらざりしなり。

宗教的時代 十八歳の秋 横濱なる或る基督教學校に入る。當時以爲らく、予は斷じて基督教信者たるまじと。於此乎晝夜其教を聽くことありしも、空しく一笑に附し去り居りしに、一夜不斗我れに反りて顧みれば、我は畢に大罪人なりと自覺しぬ、而して已に大罪人なりと自覺するに至るや、神はありく我眼前に顯はれ、汝

速かに悔改せよ、然らざれば今夜汝の靈魂さらるべしと(路可十二の二十)いとも嚴重に、予に向ふて宣告し給ふ如く感じぬ。於此乎、予は覺へず、知らず、『オー神よ此罪人を憐れみ給へ、予は一生の間、只だ神の命令を是れ守らんのみ』と誓約したりき。嗟呼、顧みれば予が此言を發してより既に茲に三十有餘年の星霜を経たり、而して其間信仰の變遷あり、事業の轉換あり、風に吹かれ、雨に暴され、義理と人情との挾撃にも遭ひ、貧と病との襲來をも受け、朋友には賣られ、世人には罵られ、幾多の悲境に沈み幾多の逆境に陥りたりき、而かも未だ曾て一日だも神への祈禱を廢したることあらず。予は此誓約以來、更に神に罪を犯しぬ。而かも神は直に愛罰を降して、予を悔改に導き給ひぬ。予は其後懷疑の雲に閉ざれたることありき、而かも神は那れの邊にか毎に其靈光を洩し給ひぬ。予は屢々自力に頼りて、神への誓約を無視したることありき、而かも神は毎に其業を失

敗に歸せしめ、神の命令にあらずんば、何事をも企つべからずと告げ給ひぬ。其後予は傳道界を去りて教育界に入り、更に教育界より記者若くは著述家となり、政治を論じ、歴史を説き、社會を鞭ち、世人を警しめ、天道よりも寧ろ人道の人となりぬ。而かも畢に神への誓約を忘るゝこと能はざりき、顧みれば予れ神を捉へたるにあらず、神子を捉へ給ひしなり、而して今や左曲右轉の後いよく神の執轡の下に直馳すべき身の上となりぬ。

嗚呼予は最早や自ら何事をも企てざるべし。又た何物をも望まざるべし、自今以後は只だ神の命令を是れ守らんのみと決心しぬ。予は二十にしてエジプトを出で、其後三十年間曠野に彷徨ひ今や漸くカナンに着して將にイスラエル國民の建設に與らんとす、然り而して其動物性時代より功名心時代に移り、而して遂に宗教の人となりたる、過去五十年の一生を回顧し來れば、其間我れに非ざる靈導の

雲ともなり火ともなりて、常に我が頭上に在りし事を悟らすんばあらず、而して此の汚れたる、此の謀判せる、此の罪深き僞兒をも、神は尙ほ彼の放蕩息子に如くに愛し給ふかと思へば、感謝の念禁ずる能はざるものあるのみ。

誰か謂ふ歳暮悲し矣と。今や予は唯だ此の感謝あるのみ。誰か嘆す老將に到らんとすと。予は五十年にして、始めて天命を知つて動かんとするなり、乃ち茲に喜んで明治四十三年を送り、更に樂んで明治四十四年を迎へんと欲す。

日本現時の諸宗教家を評す

今回成功雜誌社より宗教號を發刊したり、就て之を見るに、日本現時に於ける諸宗教家の主張を載せて一目瞭然たるものあり、乃ち試みに之を畧評すべし。

第一に現はるゝものは、建仁寺派の管長、竹田默雷氏なり。流石は默雷氏其人丈ありて、直に大悟の奥底を指して曰く、

(ちやが最後は矢張り自我の中に湧き出づる大信ちや。今宇宙は我れの權化ちやと思ひなさい。全宇宙を我

の中へ引つ包んで了ふさ。我より以外の何物をも否定しなさい。公案なごが何んになりますウマ。

此一言は、往々未熟者をして倫理を没却せしめ、形體を無視せしめ、而して終に譯もなく唯我獨尊を極め込みしむる頗る危険なる説法を含む。然れども大乘佛教の奥義は、確かに此處に存すご知るべし、而して此大理想ご大確信ごを懷てこそ、始めて宇宙大の大人物となるを得るなれ。尤も今の佛者に其人あるや否や、語氣を以て之を推すに、默雷氏は確かに其處に格れるものゝ如し、敬崇の情に禁へず。

第二は基督教會の巨擘、海老名彈正氏なり。同氏は信仰の三轉を説て、最初は自我中心の人、第二は唯だ神の命に維れ従ふの狀態、第三は我と神との合一より成れる活動より、遂に神の完全なる如く完全なるに在りとの向上的理想に及べり。海老名氏の信仰の經路は恰も予が信仰の經路と同じ、説き得て眞境を指示するものと謂ふべ

し。蓋し海老名氏は大思想家にして、其思想は常に光明に向ふて馳せ、直に神の坐に達す、而して此點に於ては近來稀有の頭腦なりと謂ふべし、然れども彼れ神人合一の自覺即自得に於ては何ん、是れ吾人が更に同氏より聽かんと欲するところのものなり。

第三は天台宗大學長、修多羅亮延氏なり。同氏は詳細に佛敎を分解し、お經の文句を並べ、各宗の區別を説き、如何にも學者らしき態度に出でぬ。然れども吾人の如き素人には、其説くところ煩瑣にして明瞭ならず、殊に最後にデカーツを評して當らず、畢にエンベリシズムに墮ち、無我の境に道義を滅し、近く譬を取りて益々情理に遠ざかるところは、畢竟佛敎を説くも、未だ佛敎を味ふに至らざる罪に歸すると斷すべし、非乎。

第四は希臘敎會の頭領、ニコライ大僧正なり。吾人は同僧正の説を讀み去り讀み了はりて、啞然たる之を久うす。即ち一言に之れを

評せば、「古色蒼然たり」と謂ふの外なし。其の造物主の實在を説き、靈魂不滅を説き、信約十二ヶ條を説き、信仰を説き、山上の敎訓を説き、終に十誠を説て之れを結びたるところには懷舊の情に堪へざるものあり。顧みれば吾人も今を去る三十年以前には、此の敎理に心酔し、此の敎理を布説したるものとす、今にして憶へば、悚然身に粟を生せしむる感なくんばあらず。希臘敎の振はざる所以ありと謂ふべし。

第五は曹洞宗大學長、秋野孝道氏なり。同氏が修證の二道を説くところ、確かに其身に覺へあるものと認めたり、同氏は空學者にあらず、正に學思に努力するものと見ゆ、其説くところの簡易明瞭なることは默雷氏に優れり、但し其自得に於ては、未だ室に入らざるもの、如し。

第六は今蓮如と呼ぶる、近角常觀氏なり。一昨年の事と覺ゆ。井

上哲次郎氏等が率先して、宗教倫理會とも稱すべきものを組織し、帝國大學の一室に、佛耶兩界の名士と教授博士方等を集め、各々所見を闘はしめたるとありき。其時近角氏は見佛の實驗談を試み、予は之れに次で「ソナ事は耶蘇教には珍からず、予等の如きは。幾度か見神の實驗をなしぬ、而も是れ漸く信仰の初歩のみ、敢て誇りて告ぐべきほどのものにあらず」と述べたるを記憶す。然るに今や近角氏は曰く、「佛を見聞する事の様に思ふてはならぬ、何か目に佛の光を感じたり、事實に接する様に思ふと妄見に陥る、佛の慈悲は内心に於ける實驗で、肉眼に見たり、耳底に感ずる如き相對的のものでない」と、一段の進境なりと謂ふべし。尤も同氏が人の罪惡を説くところ、佛の慈悲を説くところ、而して大なる信仰の効果を説くところの眞面目と熱情に至りては、敬服の外あらず。同氏の所説は保羅の贖罪説を踏襲する如くに聞へて甚だ面白からず感ずと雖ども、其

誠意と自信に至りては、確かに佛界稀有の人とす。

第七は曹洞宗大學教授、忽滑谷快天其人とす。同氏は目下佛敎界の人氣男なり、予の友人予に告て曰く、忽滑谷君は確かに崇敬すべき一人とす、試みに一度會ふべしと、予も亦た嘗て同氏の著書を讀み、色々の事を面白く書く人哉と想ひたることありき。今や同氏が佛敎信仰の經路に起る難問題解決法と題して説くところを見るに、極めて通俗的に解難し去り、頗る得意の如く見ゆると雖ども、畢竟理に落て頗る醜し。又た其の死後の靈魂を説くところも、行跡の不滅説で未來の賞罰を無視して、高しとする處などは、まだ若し最も轉禍爲福の覺悟を述べるところは確かに自家の物來となり居るもの、如く、其の良智と見性成佛との意を最も簡明に説明するところは、感服の外なし、但し其の人物の如何は此の文のみにて、判り難し。

第八は番町教會牧師、綱島佳吉氏なり、同氏と予とは卅年來の知己なり、其天性より云は、兩人の間相反するもの多し、同氏は溫柔の人なり、而して予は頑強の質なり、同氏は謹恪の性を有し、予は暴猛の氣を喜ぶ、然れども予が常に同氏に推服するところは、同氏が深く同情の資に富み、仁者無敵の胸懷を有するに在り。於此乎同氏の宗教觀は、矢張り同氏の天性より發し、哲學的にもあらず、形式的にもあらず、文藝的にもあらず、美的にもあらず、當に善人が善神に合體したるものと謂ふべきのみ。左れば同氏の述懐の如く、若夫れ同氏にして基督教に歸依することなからんか、善人なれば善人なる丈、此世の快樂に其身を放擲し去り、全く肉の人となり了せしや亦た未だ知るべからず、只だ夫れ宗教界に入りぬ、こゝを以て神とも佛ともなりて、今日の光明を發するに至りたるなれ。宗教は確かに同氏の生命にして生命となれる宗教は、同氏に於て之を見るべし、敬愛の念切ならざるを得ず。

し、敬愛の念切ならざるを得ず。

第九は顯本法華大學林長、今成乾隨氏なり。同氏は不思議の靈的動機より得道したる順序を説き、得道後報恩の心の盛んなることを述べ、遂に「常樂我淨」の眞境に入りたるが如く演述す、吾人と其信仰の經路を同うするや奇と謂ふべし。最にも同氏が最後に佛法僧の三別より、久遠完成釋迦牟尼佛を説き、稱名道の救拯を陳べ、終に日蓮のみを擔ぎ出して有難がるどころなごは、吾人の見識に遅るゝこと二十年、知らず同氏は單に教化の法便として之を道ふか、抑亦た自ら實に其れと信するか、最後の一言は、吾人に向つては言はずもがな。

第十は立教大學校長、元田作之進氏なり。同氏が有り觸れたる舊來の神學を説て得々たるところは、寧ろ稚氣ありて愛すべしと謂べし、而かも今日の青年は、最早やかゝる幼稚のシイズムを以て導き得べし、

くもあらず、同氏の進歩せざる驚くべきものあり、但し同氏の眞面目にして、懇篤の情に富み、萬方無礙の人たるや稱すべし。

第十一は天台大學教頭末廣照慶氏なり。同氏が傳教大師の人格を陳べ來て「鎮護國家」の大精神を紹介するところは、人をして感奮せしむるものあり、又其教理を説くや、明晰にして清水に月を宿すの概あり。然而して其大乘と小乗とを分て有爲涅槃無爲涅槃となし、一は消極にして一は積極的なり。一は死し一は活く。天台の奧義は、自己を眞如に合せしめて、更に衆生濟度に向ふに在りと説くところは、吾人の所謂の神人合一より、更に愛隣の主張に移るところにして、與に共に語るべきものあつて存す。尤も其修行法を説くところはスコラスチックに落ち、靈魂不滅を謂ふところは笑ふべき輪廻説の外に出づる能はざるは、聊か惜むべきところとす。

第十二は眞言宗豊山大學長權田雷斧氏なり。同氏は眞面目の人と

す、同氏が信仰は非常の時に起るべきものなりとして之を自己の實験に當て箝めて述べ來るところには、無邪氣にして生氣あり、更に又宗教心を得んとするには、學問に捕はれぬ様用心すべしと説き、信仰の初歩は、只だ素直に佛の命令を行ふ様勉むるに在りと訓へ來る處などは、素人向の教訓なりと雖も、熟したるものなり。然而して最後に眞言には純他力、純自力なるものなしと辯じ。三力俱足より、信仰の效果に説き入るところなどは、庖丁の牛を解く趣あり。老手にあらずんば能はず。

第十三は希臘教會の瀬沼恪太郎氏なるも、ニコライ僧正已に前述の如し、評すべきほどの事もなし。第十四は拙者なるも是れ亦た紹介する必要なく、第十五は「淨土宗神學の三大門」と題する中島觀琇氏なるも、其題目の示す如く、所謂の神學を説きたるものなるを以て、一個の見識を有するものには價值なく、第十六「眞言の安心立命法」

と題する佐々木月樵氏なるも、是れ亦た専ら報恩心と満足主義を鼓吹する素人訓のみにして評するに足らず。然而して第十七は帝國大學講師荻原雲來氏なるが、同氏の佛教を説くや極めて明白なり、行て學ぶべし、而して今や同氏が宗教界に、大人格を要求する熱望は吾人と其感を同ふすと謂ふべし。然而して第十八は希臘教會の昇曙夢氏なるが、氏が真に希臘教會の信條を奉ずるや否やは疑問なるも、氏が文學的趣味を以て宗教を喜ぶや面白く、其理性と信仰との衝突に悩むところあるや、寧ろ愛すべきものありと謂ふべし。

斯くて第十九は本派本願寺參事赤松連城氏なり。同氏は大膽に他力宗の本色を顯はし、戒定慧の努力を斥けて、直に報恩謝徳の境涯に入れよと説き宗教は理由なくして信するに在るのみと疾呼するところは、流石に有名なる大和尚と思はるゝも、此の教理の間をくぐりて本願寺派墮落坊主の往來する面影や、宛がら眼に視るが如くに

想はる。

第二十は救世軍の山室軍平氏なり。同氏の眞面目なることは今更疑ふ餘地もなし、又た同氏の辯の輕快にして、而かも人の肺腑を衝くところは、同氏獨特の武器と謂ふべし。然而して同氏が救世軍の來歴と、其事業を説くところは眞實にして、救世軍が世界の人類を祝福しつゝあることは實に讚嘆の外あらず。但し其教理の古くして杜撰なるも、其事業の餘りに輸入的なることには、一考を願ひたきものなりと思ふなり。

吁余輩は最早や壓きたり、請ふ此れより省略して其好むものゝみを評せんか。

先づ大日本世界教の教旨と題せる川面凡兒氏を謂ふべし。同氏の主張は殆んど吾人の其れに同じと謂ふべし。然れども同氏が日本には歐米の糟粕を嘗めず、神代の昔時よりして絶大の哲學系統があ

る、寧ろ世界列國の諸宗教諸哲學を凌駕するに足るものがあるから、之を發展せしめて、世界の諸宗教諸哲學を統一せしめよと述ぶるところの意味を知るに苦しむ。川面氏の所謂日本獨特のものとは何ぞ、神道か非か、吾人はこゝに至りて微笑を洩らさざるを得ざらんとす。次には目白の釋慶淳氏なり。同氏は先づ素人に説くべき教理を陳べたる後、更に一大法音を揚げて曰く、第一には佛教の各宗を打て一丸となし、各宗協同の行動を取らしむべし。第二には更に進んで佛基兩者を合同せしめ、こゝに『兩部耶蘇教』と稱するものを起し、恰も往時に於ける神佛合體の如く組織すべしと、實に奇抜なる議論と謂はざるべからず。如聞弘法大師が唐に渡りて師事せし和尚は、當事は基督教派中の一なるキリストリアンの坊主なりしと、然則慶淳氏は正に開祖の意を繼ぐものと謂ふべき歟。次には眞佛教派中に其人ありと知られたる境野黃洋氏と加藤咄堂

氏其人なり、境野氏は餘程渦毛の曲りたる人に見ゆ、到るところに反動して、其初は律宗を好み、其次は禪を喜び、更に眞宗に移り、今又た日蓮の信者たらんとすと謂ふ。其の之を明々地に告白するや愛すべしと雖ども、其眞面目たるべきものに向ふて不眞面目の態度を取るは、稱すべき事にあらず。加藤咄堂氏も亦自白して曰く、「嚴格なる意義から言はば、僕は未だ信仰を得て居ないのかも知れない」と、夫れ佛敎界に其人ありと知られたる名士にして、其實自ら其信仰を得て居るや否や知らずと謂ふ、其の語調や甚だ軽く、兩人とも自ら悔りて、佛法爲めに悔られんとす。其天真に出でたるを悦ぶと同時に、其人物の重からざるを惜む。

此の外青山學院長、小方仙之助氏の告白は、眞摯人に迫るの概あり。黃蘗宗管長の高津柏樹氏の語格は、脱落たる風姿と、人類を思ふ熱情と、不動の意志とを想見せしむ。然而して其他佛耶兩教界は勿論

王陽明回教モルモンの諸宗教に至るまで各々名士の意見を掲げ、龍騰り虎嘯き、雲起り、風舞ふの壯觀を呈するものなしとせず。然れども今や之を略し、唯だ一言以て總體を評せば、たとひ其間非真面目なるものなきにあらざるも、一般の諸宗教家が孰れも真面目に其自信と抱負とを語るを觀て、將に來らんとする我が宗教界の大活動を見せざる能はず、即ち時の徴候に照らして括目の情に禁へずとや謂はん。

日糖事件

霹靂一聲、醜漢倒る、近來の大快事也。曩には教科書事件あり、天下の鼠賊を一掃して、法威烈日の如く輝けり、而して今や日糖事件起る、司直未だ死せざりき。吾人は神の恩寵を説く者なり、然れども時としては、ソドム、ゴモラの上に天火を呼ばざるを得ず、是れ亦た愛の道なり。嗚呼彼の人士、今や鐵窓の下に孤坐して、果して何事をや觀すらん。或は白眼以て青雲を睨み、大賊免れて、小賊縛

せらるるにて怨むらん。或は今更ながら其身の愚鈍を覺り、同じ收賄の仲間なるも、ブルイ奴は網に入らず、馬鹿正直のみ、魚店に曝さる、憤惋無限と悔むらん。夫れ然り、然れども、其本心の未だ全く消磨せざるものに於ては、過ぎ來し方を顧み、行く末を想ひ、ア、我れながら何事ぞ、武士の家庭に人となり、嘗て嚴父の前に我が孝經を誦せしとき、吾が志は立身興家、美名を天下に擧ぐるにありき。嘗て學友と偕に螢雪に眼を曝せしとき、吾志はワシントンにありき。コブデンにありき、嘗て始めて政界に入りしとき、吾志はピットの蹤を追ひ、ヂスレリーの勳功を建つるにてありき。而して當時夢裡だも、金錢の奴隸たるべしとは思はざりき。予の收賄には理由あり、左れど今や之を語るの要を見ず、只だ恐る、吾れは宿昔の志を遂ぐる能はず、却て幼少よりの素願に背き、家名を汚がしぬ、醜名を帯びぬ、想ふ、我子我妻の世上の人に對するるとき、如何に恥づかしく

感すらん。天高しと雖ども躡り、地厚しと雖ども踏せん。是れ皆誰れの愆過ぞ、嘗ては排天の詩を吟じ、竊かに三樹を偲びしが、今や境を同ふして其情を異にす、慚愧焉んぞ禁ゆべげんや。嗟呼已んぬる哉、吾れ遂に吾が面目を保つの道なきか、腹を屠て以て我罪を謝せんか、今や消極的の蠻風を稱せず、况んや之が爲めに益するものなきに於てをや。然らば則吾れ將た如何に吾身を處すべき。然り、然かなり、此上は、名利を離れ、私慾を絶ち、自今如何なる難業苦業をも厭はず、社會の爲めに盡さん哉。我國今日の病弊は決死の人を缺くに在り。請ふ今死す我身を存へて、神と人との爲めに献げん哉。然り然かなり、我志已に決すとして、今や死して活るの覺悟に出づるものありつらん、水の流れと人の行末は知るべからず。棺を蓋ふて事始めて定まる。吾人は未だ猝かに今回の人士を指して醜漢視すること能はざるなり。

酒匂常明氏の自殺に就て

かくすればかくなるものと知りながら
やむに止れぬ大和魂

是れ維新革命の傑士吉田松陰が、鼎鑊に臨んで高吟したる遺詠なり。物替り星移りて、明治の好人物酒匂常明氏は、銃聲一發、其身を殺すに當り、世に處決書なるものを遺して曰く、

予の朝野間に若干の信用を得たるは、誠意と正直さに因る……予は厘毛の私なく一點疚しきことなく、一般の師範を以て自ら居れり……今回の瀆職暴露によりて、一部重役と一部株主との秘策行はれたるを

知り、果然たるを免れず……予は責任を有せずと云はず、否、事業の窮境と資本者の迷惑と、暴露せる醜状を見て、至大の憂苦を感じ、不明の全責任を一身に負ふて處決するところあらんとする也。
更に其家族に遺書して曰く、

最愛の兒よ、兒等の眼前に貧窮と云ふ大敵は逼迫せり、去りならが恐るゝ勿れ、健康と正直と勤勉と忍耐と勇氣とは、無限の資本なり、悲嘆に換ゆるに奮闘を以てせよ、忠孝節義家を興し世に盡せよ、斯く云へるも願みれば兒尙ほ幼なるもの多し憐れむべし。
兒の母は今より稀有の艱難に遭遇するなり、長じたる者先づ此消息を解し、長幼相率ひ、母の命に服従し、他日誓つて母に慰安と幸福とを供する爲めに勉勵せよ云々。

誰か之を讀んで慘烈の情に襲はれざるものあらんや又此に到れる酒匂氏の胸中を察して、誰か悲涙に袖を濡さざるものあらんや。然れども維新以前の志士と、明治聖代の紳士との間に太酷しき變遷あるを認めざるべからず。一は單身獨歩自ら其身を死地に陥れて顧みず、一は醜族に擁せられて終に自殺の止むなきに至る。予は酒匂氏を貶するものにあらず、寧ろ其死を憐れみ、其死によりて、茲に一大警告を世人に與へんと欲するなり。

顧みれば、福澤氏が、夙に廢刀を實行して前垂掛の人となり、壯んに不生産的武士を罵倒し、束修を改めて月謝と爲し、學を賣り説を鬻ぐことを始め、楠公の忠死を權助の首縊に異ならずと論じ、世に西洋輸入の實利主義を鼓吹せしより以來、世は滔々として拜金宗の人となり、人魂の價値は月給の多寡によりて品評せられ、人物の高下は人爵によりてのみ定められ、議員は定價附の人となり、貴顯は富豪の提灯持となり、博士學者も亦た俗商の傭人となりて得々たるに至る、然而して世の指導者たるべき新聞紙は嘗て吾人が論せし如く、殆んど皆廢敗墮落の誘引者と成り了せり。近日タイムスの主筆チロル來り、暗に冷罵を彼等に加へ、更に米國教育界の大家バルトン來り。我帝國教育會に於て、米國大學の特色を説き、我大學の天下に誇るべきもの四あり、一曰、眞理の研究を重ずること、二曰、學者主張の自由、三曰、人生の全般に關する精神的開發、四曰、公

共の爲めに盡す精神是れなりと呼號し、單刀直入、我國人の急處を突破し去つて、汝の國には有之乎と云はぬばかりの氣焰を吐けり。嗟呼何んたる情けなき憤慨の事共ぞや。論者皆謂ふ、我外交の振はざる久し、米國に蹴られ、獨國に愚弄せられ、今は清國よりすら侮れんとす、國家の面目何に據て立つべき乎と、然り予も亦同感に堪へざるものあり。然れども是れ政治上の事、吾黨の直接關係を有するものにあらずと雖も、彼れチロルの言辭の如き、バルトンの説の如きは、直に我黨の責任問題に屬す、吾黨は之を聞て自ら恥ぢ且つ國家の爲めに嘆かざるを得ず。吾黨は維新以來福澤氏一派と相對して起ち、彼れは物質的の方面に向ひ、我れは精神的の方面に向へるものなり、然るに彼れや遂に黄金萬能時代を現出するまでに成功し、我れや今尙ほ荒野に叫び、畢に外國人をして我國人に向つて、孔孟の教を説かしむるに至る、慚愧何ぞ堪ゆべけんや。さるにても

我國人は、移民の制限、滿洲の紛議、其他實利に關する惡戯者の妨害に會ふて、憤然劔を撫て起つの慨を示すも、精神的方面に於ては、外人より冷罵を其頭上に加へられ、小學兒童視せられながら、猶且つ猛然として反省し、慨然奮起する能はざるまでに墮落したる乎。あまりに悲しく情けなく、我黨は我責任を感ずると同時に、萬斛の涙を我國民の上に濺がざるを得ず。嗟吁吉田松陰は逝けり、西郷も木戸も大久保も皆去れり、而して今や孔孟の教を外人より聽かせられ、國辱とも何とも思はず、恥かしとも何とも感せずとは、情けなくも又た奮慨の限りなり。

然るに今や代議士の瀆職事件及び酒匂常明氏の自殺并に其遺書によりて一大警告を得、漸く迷夢より覺めんことを。夫れ瀆職代議士中、或は酒匂氏の如く感ずるものもあらん感せざる者もあらん、然れども之れが爲めに妻子悲しみ、老親嘆き、其身のみかは、其家族骨肉

及び子孫までが、永く世人より指彈せらるゝものとなりしを想へば、今更の如く悔恨の情にや禁へざらん。曩時に教科書事件起りしとき、之れに關係せる人々は、忽ち九地に落ち、或は日蔭の身となりて朽死し、或は異郷に其身を賣るの止むなきに至り、今尙ほ其子孫をして肩幅狭く此世を渡らしむ、此を是れ知らざるにあらず、知りて尙ほ其轍を踏む所以のものは、利慾之を誘へばなり、狐鼠に罪なし、餌食に誘はれて陷穽に落つ、其情に於て恕すべきものあるも、因果は終に脱がるゝ能はず、天網恢々疎の如くして洩らさず、我黨の唱ふところ豈的然として應ずるにあらずや。謂ふこと勿れ、世間誤魔化すべし、狡兎事を成し遂たりと、決して然らず、縦しや彼れ惡運に乗じて、榮華の夢を貪り得べくも、心胸恒に平かならず、幸福を求めて煩惱を得、卵を求めて石を得るもの比々皆な是なり。縦しや彼れ俗心卑魂を喜ばせて、傲然妻妾に誇り得るも、蕃祭の紳士識者

の一顧(ひと)も價(あたい)せず、況(いは)んや其(その)非行(ひかう)の暴露(ばうろ)せらるゝに於(お)ては、悔恨(くわいこん)臍(せき)を嚙(か)むも及(およ)ぶなく、醜骸(しうがい)を抱(いだ)いて徒(ただ)に痛哭(つうく)し、終(つひ)に子孫(しそん)を戒(いさ)めて自殺(じく)するに至(いた)る。予(よ)は酒匂(さうな)氏(し)を醜漢(しうかん)と同一(どうい)視(し)する者(もの)にあらず、然(しか)れども其(その)三(さん)千(せん)金(ご)より三(さん)萬(まん)金(ご)に轉(てん)する時(とき)、已(すで)に死蔭(しえん)の谷(たに)に其(その)一(いつ)脚(きやく)を入(い)れたるものゝ斷(た)ずるものなり、但(た)だ彼(か)れや好人物(かうじんぶつ)なり、而(しか)して武士(ぶし)の家庭(かてい)に人(ひと)となりしもの、是(こゝ)故(ゆゑ)に内(うち)は祖先(そせん)に對(たい)して申譯(まをしわけ)なく、外(ほか)は英(えい)國(こく)紳士(しんし)に後(お)れざらんことを期(き)し、潔(いさよ)く全責任(ぜんせきにん)を負(お)ふて處決(じよけつ)したることには、固(もと)より萬斛(ばんこく)の同情(どうじやう)を寄(よ)すべきものなりと雖(い)ども、永(なが)く後(ご)進者(しんしや)の懲戒(ちやうがい)たるべきを信(しん)ず。彼(か)れ他(た)の瀆職議員(とくしやくぎいん)等は今(こん)後(ご)如何(いか)なる態度(たいど)に出(い)づべき、世(せ)上(じやう)同臭(どうしゆう)の徒(と)は却(かへ)つて氣(き)の毒(どく)の感(かん)ありと謂(い)ふと雖(い)ども、苟(いやく)も天下(てんか)の風矯(ふうきやう)に志(こゝろざし)あるものは、斷(た)じて寬恕(くわんじよ)すべからず、國(こく)家(か)の爲(ため)めに斬(き)つて以(もつ)て殉(じゆん)すべきなり。嗟(あ)呼(い)吾(ご)人(じん)力(ちから)なく獨(ひとり)り荒野(あれの)に叫(こゑ)ぶのみと雖(い)ども、天(てん)道(だう)は遂(つひ)に吾(ご)人(じん)に與(よ)みず、吾(ご)人(じん)は未(いま)だ猝(は)かに失(し)望(ぼう)すべくも

あらざるなり。酒匂(さうな)氏(し)の所決(しよけつ)は、確(た)かに世(せ)人(じん)に一大(だい)警告(けいこく)を與(よ)ふるもの、吾(ご)人(じん)は酒匂(さうな)氏(し)に對(たい)し、謹(つし)んで謝意(しゃい)を表(へ)す。

横井時雄氏に就て

予(よ)の先輩(せんぱい)横井(よこい)時雄(ときゆう)君(くん)、今(こん)回(わい)端(は)なくも鐵窓(てつそう)の下(した)に監禁(かんきん)せらる。痛嘆(つうたん)禁(きん)する能(あた)はざるものあり。

明治(めいじ)十四(じゆ)年(ねん)の初夏(しよか)と覺(おぼ)ゆ、予(よ)れ築地(つきぢ)大學(だいがく)より逐(お)はれて、將(まさ)に關西(くわんさい)に走(は)らんとす。時(とき)の先輩(せんぱい)植村(うゑむら)正久(まさひさ)、小崎(こさき)弘道(こうだう)、田村(たむら)直臣(ちぢん)、吉岡(よしか)弘毅(こうぎ)

等の諸君、予の爲めに送別の宴を墨堤に開き、併せて當時上京せる横井時雄君を其席に歡迎す。予の横井君を知る此時に始まる。當時予等は、同志社出身者の動靜を聞き、田舎漢何程の事やあらんと侮蔑し居たりき。然るに予の横井君を見るや、第一、横井君の眉目清秀にして如何にも貴公子然たる風采に感せしめられ、第二、議論風發傍若無人の概あるに驚かされ、第三、古今を引き、東西を擧げ、歴史を論じ、人物を評し、政治を議し、宗教を説き、直に之を我が國の今日に擬するところ、如何にも博學者たると同時に、又其識見の非凡なるに心服せしめられぬ、而して予は當時より横井君を師友と仰ぐの心を起せり。

明治十六年の秋と覺ゆ、予が備中高梁教會の牧師となりて按手禮を受けんとするや、新島氏は京都より來り、澤山氏は大阪より來り、金森氏は岡山より來り、横井君も亦た伊豫の今治より來會せられぬ。

之を記す、當時同地の演劇場に於て大演說會を開き、君の將に演壇に上らんとするや、君竊かに予を招て請ふて曰く、願くは予の爲めに神に祈れど、而して相共に演劇場の暗室に入りて祈りたることありき、君の信仰や決して偽物にあらざりき。

明治廿四年及び廿五年の交と覺ゆ。保守的行動の勢力と相俟て、排外思想大に起り、我等基督教徒が教育勸語に反抗するものと誣ひられ、處々に物議を起したるの當時、横井君は憤然として起ち、本郷なる乃公が司牧せる大會堂に大演說會を開き、天下に向ふて堂々の辯を鼓し、予を招て俱に之に與らしめ、始て説教壇上より、政治を議するの端を開きぬ。加之、當時横井君は帝國大學の諸教授にも交り、伊藤公にも行き、勝伯にも赴き、其乃父の舊縁を傳て、諸元老、諸政治家の間に知己を得たり、而して是れ當時に在ては、各派を通じて我が牧師傳道者の敢て爲さざるどころ、否、敢て爲す能は

ざりしところのものとす。予は於此乎、益々横井君の見識に服しき。其後横井君同志社の校長たり、而して所謂同志社事件なるものを惹起せり。當時横井君の基督教観は、漸々高等批評の爲めに變化しつゝありき。於此乎一方には既廢の神學を擲つと同時に、こゝに進歩的の基督教を鼓吹せんと欲し、一方には從來抱き居たる一理想を實現し、同志社をして宗教傳播の機械より一轉して、天下養材の大業たらしめんと企てぬ。デビス、ゴルドン、ラルネツドの諸宣教師等は、校舎の建築物及び其の他の財産を擁して従はず、遂に海外より非基督教徒たるマカビーとかバガビーとか云へる辯護士を備ひ來り、我國の増島辯護士と相謀り、已に法廷に争はんとせり。予等は憤れり、村井、成瀬、岸本の諸君と共に宣教師並にマカビーに談判せり、同志社々員會も亦數々東都に開かれぬ、而も宣教師は尙も執て動かざりき。丹羽、留岡、高野の諸君は、宣教師に附して運動

せり。いよゝ世俗の法官に其裁決を仰ぐこと、定りぬ。於此乎、予横井君に説て曰く、事既にこゝに至る、速かに勇退すべきのみ、我が基督教界をして本願寺の如き醜態に陥らしむることなからしめよと。横井君曰諾、乃ち直に任を解き、同志社全部を宣教師派に渡せり。其襟度實に欽すべきものありき。横井君の同志社を退くや、一轉して新聞界に入れり。予も亦た異端を宣傳するごの名義の下に、青年會を放逐せられたり。爾來相會はざること數年。一日人あり予に來り説て曰く、今回の總選舉に際し、基督教の名士を前橋市より擧げんと欲す、君請ふ其人を選べよと。予先づ押川君を推せり、押川君笑ふて應せず。因て横井君を推せり、横井君起たんとす。偶々之を聞て遽かに岡山市より君を迎ふるあり、乃ち岡山市に赴て選出せられぬ。是れ横井君が政治界に其身を投じたる順序とす、而して常に予と相關するものあるや知るべ

きなり。
 横井君は嘗て幾干かの財産を有したりき。乃父小楠先生の高官に在るや、暫時のみ、然れども尙ほ子孫に其慶を遺せり。横井君の今治に牧師たるや、其月給僅に十數圓のみ。而かも其教會員に無告の人あるや、嘗て其魂を慰むるのみならず、並せて其身をも扶けたり。當時に於ける横井君の隱徳は、今尙ほ美談として承傳せらる。學者往々にして其書を人に貸與することを厭ふ、而かも横井君は其の新購の書をも人の借去に任せて惜しまざりき。横井君は情に脆し、是故に知人の難澁を看過する能はず、常に救援の勞を取る。予の見聞の範圍内に於てすら、已に幾多の例あるを見る。於此乎、君の財産も間もなく底を拂ふて盡きぬ。
 近時金森通倫君に邂逅す。金森君の曰く、横井も予の屋前に、大厦を築けり、輪奐觀るべきものありと。予の曰く、君の新築も亦た

壯麗偉大なるものありと聞く。君の家に比して果して如何。金森君曰く、切々我等の及ぶところにあらずと。予の曰く、羨しい哉、二君の世に時めくことや。君は勤儉貯蓄の書を著して大金を儲け、横井君は政治家となりて大厦を築く、其手腕の敏辣なる、吾人をして其後へに瞻若たらしむ。君に告ぐ、弟は到底貧乏籤を免る能はず、更に宗教界に入らんとす、請ふ憫察せよ。金森君曰く、ナニ金が出来ものか、然し金持と思はる、丈でもよろしかるべきかと云々。
 今春一友北海道より來り、身自ら樺太に於て見聞したりとて横井君の態度を惡評す。座に原田助、綱島佳吉の二君あり、赫火となりて横井君の爲めに辯護し、嘗て新紙に顯はれたる收賄記事の如きは誤傳なり、誣謗なり、現に横井君は今方に大貧乏の苦境に在り、我等は其内實を知れり、世間の風評取るに足らず、かれ樺太に行ける如きも、決して君等が邪推する如きものにあらざるなりと論ず。予

傍に在り、其中を執て答て曰く、予は今日の横井君を知らず、而かも三十年來の横井君を知る、横井君は悪人にあらず、貪婪家にあらず、愛腸慈眼の士なり、高風清月の人なり、但だかれ大厦を新築する如きは、適々嫌疑を招くの基たらん、聊か君の爲め惜まざるを得ずと。二君曰く新築も亦借金にて成れりと。予の曰く然り借金してまでも新築を起さんと欲する其動氣を惜むなりと。

今回の事たる、予は全く門外漢たり、然れども熟々横井君の性格に就て之を鑑するに、君は決して悪むべき罪過を犯すべきものにあらず。君の美質や予れ之を知る、否、諸友皆之を知る。衆評に曰く、肥後人の性は陰險なり。利己中心なり。打解くる如く見せて打解けざるなり。競争心の強きものなり。虚榮心の熾んなるものなり。謀計を喜ぶものなり。天真爛漫たる能はざるものなりと。然るに君や決して陰險の人にあらず、利己中心の人にあらず、頭巾を脱て内情

を語るの人なり、稚心を失はざる人なり、少しく智畧を勞する傾きありと雖も、其裏を搔かるゝときには、直に其の心術を白状し去るの快胸を有す。彼れは人の謂ふ如き肥後の人物にあらざるなり。尤も彼れに強からざるも競争心あり、微弱なるも虚榮心あり、若夫れ彼れに肥後の臭味ありとせば、唯だ此二點に存せんか、而して此二點や往々識者の笑評を估ひ、更に君の行動を誤らしめたるもの、吾人君に於て之を惜む。

其れ然り然れども畢竟するところ吾人は君の愛すべきを見るも其惡むべきものを見る能はず。九州の男子には腹の黒き人多し、執着心の強き人多し、然るに君や之を脱す。君は天風に駕して大空を渡るの高懷を有す、是れ君が乃父より繼承せる美性なり。君は弱きとき強く、強きときに弱しとの教訓を味ひ、時々天父の前に出で其痴を訴ふるの虚心を有す。是れ彼れが尙ほ宗教的生命を失はざるの

證なり。聞之今や鐵窓の下に聖書を繙く。過去幾多の經歷を顧み
 來て、感想果して如何ぞや。今は二十年前の住事となりぬ。市原盛
 宏氏の嘗て東華學校に在りしとき、一夕突如として予に問ふて曰く、
 予將に海外留學の途に上らんとす、將來果して何の社會に出づべき
 か。予の曰く、君は青年教育を以て任すべき人にあらず、又た牧
 師たるべき人にもあらず、君は世上に動くべき人なり、請ふ經濟學
 を專攻し來りて、我實業界に入らん哉。こゝを以て、今や餘りに
 宗教より遠かりしを以て、聊か遺憾に感ずるものなきにあらずと雖
 ども、市原氏は其處を得たり、予は市原氏の宗教界を去りたるを悲
 します。金森通倫君の説教は義理明晰、情致纏綿、能く人の疑を解
 き、能く人の心を動かす、嘗て吾人をして其技倆に敬服せしめしも
 のなりき。而て其基督教界を去るに至れる順序も、亦大に察すべき
 ものなしとせず。然ども金森君の人格は、尙ほ塵世に近きものあり

き、こゝを以て予は敢て金森君の傳道界を去りたるを惜しまざるな
 り。然れども彼れ横井君に至りては、元來高崇優麗の品性を有し、
 光風霽月の胸懷を持ち、腹底に泥なく、胸裡に邪氣なく、其思想の
 豫言者的にして、其意氣の人道者的なる。どこまでも宗教界の人たる
 を失はず。然るを終に今日に至る。痛惜焉ぞ禁ゆべけんや。

横井君犯法の罪あるが、非か、予れ之を知らず。唯だ其無罪たら
 んを信せんと欲す。然れども若しも萬々一犯法の罪ありとするも、
 天命の存するところ未だ遽かに知るべからず。人の性格は天稟に出
 づ、如何に泥土に委するとも、玉質遂に汚すべからず。一時の失態
 の爲めに、終生の奮發心を煥起し、一躍昇天の美例を千載に遺した
 るもの、古今其人に乏しからず。横井君にして今若し翻然として迷
 夢を覺まし、昨非を悟し、更に宗教界に歸來することあらんか、吾
 人は双手を擧げて横井君を抱迎し、仍ほ擬するに師友の禮を以てせ

んと欲す。本多、平岩、海老名、宮川、植村の諸君は、いづれも吾人の師友たるものなり。然れどもかれ欽慕の情禁する能はざるもの、天真裸々の交友を開き來るもの、耿介拔俗の標、蕭灑出塵の想を以て、吾人を驚嘆せしめ得るものは、蓋し横井君を措て、また他にあらざるなり。君の政治界に在る、宛も白鶴が家鴨に伍するが如し、冲天萬里青空に擲つもの、泥池濁流の中に餌食を争ひ、終に羽翮を破り、長脛を折り、今や螻蟻の爲めに笑はれんとす。悵悵何物か之れに過ぐべき。

嗟吁横井君歸り來れ、聖書を閲み來りて、ケバの蹤を追ふべきなり。吾人の天父に祈るところ、實に之れに外ならず。然れども若夫れ犯法の有無に關せず、尙ほも從來の塵土に彷徨し、垢を隠し、瘻を掩ひ、更に倒行逆施の擧に出でんか、吾人は其時を期して始めて横井君を葬らんと欲す。彼れ乎、此れ乎、横井君の死活今日に在り矣。

嗟吁横井君の爲人を熟知し、舊交を懷へば、萬感起り來りて、筆端容易に收め難く、思はずこゝに長文を草す。

快男子ルーツベルト

古今東西の人物中、予をして眞に快男子也と絶叫せしめしものは、上杉謙信一人なりき。近時大隈伯を得て、第二の快男子此に在りと思ひ居りしに、今や第三の快男子を得たり、ルーツベルト即ち其人也。拜金宗の米國に生れながら、飽くまで暴富家に反對して、遂に

其爪牙を抜き、八千萬の衆望を負ふて、其威を宇内に振耀し、天下の帝王并に諸豪傑を睥睨しつゝ、平和と戦鬪の鍵鑰を掌握し、幾億萬の人類を麾いて、幾回か喜憂の眉を闊開せしめぬ。男子世に生れて、宇内を其双肩に擔ふことを得ば則足る。其れ然り然れども單だ夫れ天下を左右したるを以て稱すべしとせば、ナポレオンも稱すべきなり、ピータルも稱すべきなり、然れどもルーヅベルトは彼等以上の快舉に出でぬ。其大統領の任を解て、白館を去るや、直に米國の一平民と脱化し去り、電車（電氣車）の懸革にブラ下りつゝ、衆と共に談笑す、何んたる襟懷ぞ。然而て其「アウト、ルック」雜誌社に入るや、其紙上に發表して曰く、予は嘗てより、アポット博士并に本社（ハルシ）の記者諸君に服す。其の大雜誌なるが故に非ず、其の大勢力あるが故にあらず。滔々皆濁り去る我新聞雜誌界中に立ちながら、獨り清節を持して屈するなく、能く抵柱の任を盡す、快感禁する能はざるものあり。

るが故なり。今や乃ち其末席に加はる、幸榮何んぞ限りあらんやと。乃ち片々たる一雜誌の記者となりて満足す、何んたる意氣ぞ。我日本（ハルシ）の青年諸君、諸君の師表や此に在り。我が貴顯を見る勿れ、我元老を見る勿れ、況んや猫の額の如き庭園を一孤島の上に開きつゝ、イヤ立身者で御座る、成功者で御座ると、群小に向ふて誇り散らかし、終に悪錢を握てすら、世に時めかんと欲する醜漢の如きは、諸君の唾棄にだも値せざるもの、眼を内國に向くる勿れ、内國は諸君を俗殺せしめんすんば止まず。請ふ知己を海外に求めよ、ルーヅベルトの如きは、諸君の師表たるものなり。

自殺論

誰か謂ふ、自殺は狂者の爲すところ。予は想ふ、冷靜の頭腦と、
數理の觀念を以て斷ずるも、或る情境に處するもの、自殺は自然の
みこ。

先づ彼の日々の紙上に現はれ來る自殺者の情境に觀よ、夫は死し
て稼ぐものなく、兒は多く遺りて養ふ能はず、止むなく親戚に其身
を投ずれば、日夜其家内に厄介視せられ、我子の不憫さ、我身の辛

さ、其れも一日二日ではなく、幾十幾百日の其間、時々刻々に責め
らるゝものこそせば、いつそ母子諸共に寂滅爲樂と觀念すべきは、理
の正に然るべきところにあらずや。

誰れか謂ふ、死も亦た苦しど。然り、一毛を抜き、一指を傷くも、
猶且つ苦痛を感ず、況んや頭足を鐵路に横へ、渾身を水中に投じ、
以て我が生命を斷ずるをや。然れども數を以て觀ずれば、是れ比し
て容易の業のみ、苦の甚、痛の劇、我れ之れを想像するに難からず、
然れども是れ一刹那のみ。之を幾十幾百日の痛苦と憂愁とに比す、
其利害得喪、知者を待すして知るべきにあらずや。

之を予の實驗に徴するも亦同じく然りとす。予の自殺を計りしこ
とは、蓋し一再に止らず。第一は腦症を病みし時とす、醫士の診す
るもの皆曰く、此病終に治し難からん、只だ夫れ今後數年の間、學
業を廢し、靜養以て其恢復を圖らば、或は其れ治するともあらんか

こと。時に予惟へらく、嗟呼多年の苦學到底何の得るところぞ、人生は畢竟無意義のみ、如かず、寧ろ死を祈らんと。於此乎神に向て祈て曰く、「爾若し此病患を救ひ給はば、予は終生爾の爲めに此身を献せん、然れども若し夫れ畢に治せずとせば、冀くは速に予を天國に召し給へ」と。第二は同愈生の急病にて死せし時とす。予は此時に當て、實に厭世の深淵に沈めり、惟へらく苦學何物ぞ、希望何物ぞ、空の又空、虚の又虚、我れ若し今夕死するとせば、從來の艱難辛苦は徒勞のみ、而して予の一生は無意味のみ、止みなん止みなん、予は寧ろ死の早からんことを望まざるを得ずと。然而して第三は情義の間に介りたる時とす、此時に當りて、予の最も好むところ、望むところ、祈るところは、死にてありき。然り死して以て、飢餓なく、疾病なく、世累なく、罪過なく、悔なき天國に行かんことなりき。然り當時予をして冷静の頭腦を以て、苦樂得喪を算せしめ、數理の

觀念より、禍福榮辱を量らしめなば、予は將に死するを以て、樂となし、得となし、福となし、榮となしたるに相違なき也。而して狂者を以て目すべきものにあらざるを知るなり。

然則予は何んの爲めに死せざりしか、請ふ聊か之を辯せん。當時予の第一に想到せしものは父母なりき、予の死は厭ふところにあらず、否、寧ろ好むところとなれり、而かも予れを生みしものは父母なり、而して予れに待つあるものも亦父母なり、予れ死せば此老父母を奈何にせんと、而して畢に此一念の爲めに死する能はず、更に奮闘の猛氣を恢復しぬ。第二は天命に想到したること是れなりき。顧みれば予は己に予の物に非ず、既に此身を以て神に献せり、然則情困義苦も、亦た神に委して堪へんのみ、神は無意義の鞭を與へず、又負ひ難き重荷を負はせ給はず、去來然らば往くところまで往かんのみと、而して更に樂天の生涯に向ひぬ。第三は終生の事業に想到

せしことなりき。之を聞く、古來天下に大業を成せしものは、皆悉く死を決して起ちしものに外ならず。然則予も亦た已に死を決して此に在り、若夫れ死すべき此生命を永らへ居て、之を國家の事に献せば、たとひ大業を成し能はずとも、豈多少の爲仁者たる能はざらんや、然り予れ已に死せり、而して自今予の生けるは、神の爲めのみ、人の爲めのみ、去來然らば、予は只だ終生の間、死處を求めて進まんのみと、而して更に大勇を振ひ起しぬ。

然則予は彼の自殺者を指して狂へりと謂ふものに與みする能はず、寧ろ自然の數なりと謂はんを欲す。其れ然り然れども人若し吾人に向ふて其自殺せざる理由を問はば、予は當に前上の如く答ふるあるのみ。然而して人もし已に此に到らん乎、雪中に竹根を穿ち寒中に堅氷を砕くも、亦た快哉を呼ばんのみ、更に又た鼎鑊を甘しと爲し、十字架を輕しと爲し、檐下のラザルを友となし、大元の劍を

春風と觀じ、樂ありて苦なく、夷ありて嶮なく、終生、不感、不憂、不懼の身となりて、常に活々地に動かんのみ、復た奚ぞ人世を呪はんや。偶々近時知人の世を厭ふて自殺したる訃音に接し、往時を追回して、感慨禁する能はざるものあり、乃ち我が經驗を説て以て、世の同境者の一考に資す。

解嘲一束

吾人の始めて日本教會を起すや、或曰く村井也、松村也、將た某

某也、彼等畢に何をか能くせん。彼等は惡物にあらず、僞物にあらず、然れども根氣なき我儘ものたるを奈何せん。其噴火し來るときには、煙焔天を焦すの概あるも、須臾にして世上意の如くならざるものあるを見るや、ア、莫迦々々し、止めて仕舞へと立腹し、忽ち燒石的の冷物と化し、獨り山上に横臥して、更に風月の友たるに至るや知るべきのみと。然而して吾人は敢て之を辯せざりき、是れ言を以て解くべきにあらず、行て以て示すべきものたるを知れば也。然るに今や乃ち曰く、日本教會も案外續て居る様ぢや、加之却々行り出して來た様ぢや、其機關たる「道」雜誌の如も、随分評判を博して來た、近頃は又た「道の會」なるものをも起し、其機關「道話」をも發行した、更に又た有名なる志士の會合にかゝる「道會」もあり、其の同志たる藤田の息心調和法の如き、野口の教談の如きも、亦た益々世に歡迎せられんとす、然り而して近來更に篤志家あり、松村等の新運

動に同情を表し、是れ必定天命に出でたるものなりと確信し、大に助力するところあらんとすと謂ひ、尙ほ續々天下に同志者同情者を起さんとするの傾向あり、是れ實に案外なり、然れども此の案外も亦た何時まで續くべきか、松村等の人格と、其の呼號する大事業と、果して何處まで一致し得べきか、また大疑問の存するを見る。然而して吾人は今尙ほ之を辯せず、暫く緘黙して時の來るを待たのみ。

或曰く、凡そ何の事業にもあれ、其間中心人物あるを要す、殊に

宗教に於て然りと爲す。宗教改革時代にはルーテルあり、「クエーカー」の祖にはフォックスあり、メソヂストの源にはウエスレーあり、釋迦ありて佛法起り、耶蘇ありて基督教出で、孔子ありて儒教の傳來せしことは、今更喋々するまでもなし、惟ふに日本教會は、一種の宗教改革、否、寧ろ一大新宗教を唱道するもの、如し、誰かルーテ

川たり、耶蘇たるものぞ、松村等の如きは、ルーテルの從僕たるす
 ら六ヶ敷、況や耶蘇等に擬することや、之を不倫と稱せんよりは、
 寧ろ滑稽に類すことや謂はん、其の馱法螺に卒るべきや知るべきのみ
 ぞ。吾人は嘗て論じて「時の權威」なるものを提唱し置けり、苟も史上
 に一隻眼を有するものは、高く深く廣く古今の推移と人類の進化に
 留意せざるべからずと信ず。今や諸教行き詰て、こゝに一大新運動
 を要する時機に際す、而して何人か之れに従事せざるべからざる氣
 運とはなれり。勿論吾人等は論ずるに足らず、然れども豈亦た之れ
 が前觸たり、お先手たり、將た槍持たる能はざらんや。ルーテルの
 前にも幾多の小ルーテル起りたりき、ウエスレーの前にも幾多の小
 ウエスレー起りたりき、我は只だ曠野に叫ぶ聲たるのみ、是れ吾人
 が夙に明言するところなり。更に又た諸君の語氣を以て之を推すに、
 諸君は尙未だ舊圈を脱する能はざるもの、如し、若夫れ諸君にして

今尙ほ古人を尊んで今人を卑む心意あらば、たごひ松村等は取るに
 足らずと爲すも、遂には耶蘇を十字架に刑し、孔子を陳蔡に困しま
 しむる人たるや亦た未だ知るべからず、日蓮が笥を貰ふて禮狀を書
 きしとき、誰か後日の上人たるを知るものあらんや、豫言者の墓は
 大抵子孫に依て建設せらる、吾人には須らく馬骨を買ふて、先覺を
 求むるの覺悟あらざるべからず。

或又曰く、日本教會の主張は、曖昧にして捕捉すべからず、耶蘇
 教も可し、佛法も可し、儒教も可し、神道も可し、而して老莊亦た
 大いに稱すべしと爲す、何んたる取留のなき主張ぞや、若夫れ此
 の如くんば、已に從來の宗教にて十分なり、何んぞ殊更に日本教會
 を起すの必要あらんやと。曰く吾人の可しと稱するところは其神髓
 に於て然るのみ、其教義若くは形式に於て然るにあらず、吾人を以
 て之を視れば、從來の宗教ほど曖昧なるものは之れあらず、一個の

基督教に於てすら、殆んど幾十の宗派に分れ、互に眞偽を争ふて相下らず、以て個々別々の基督教を唱道す、然らば則眞の基督教とは如何なるものぞ、一宗派に於ては乃ち有之、而かも全體を通じての基督教なるものあるとなく、吾人をして其眞偽を捕捉するに苦しましむ、曖昧も亦甚太しからずや。然而して佛法然り、神道然り、回教亦た同じく然りと爲す。然るに吾人の主張に就て之を視よ、其簡易明白なる日月の如きものあらんごす。吾人は今日の諸宗教家に警告して曰ふ、君等互に争ふを廢めよ、諸宗一如諸教一歸なり。而して窮極の神髓は、信神、修徳、愛隣、永生の四條に外ならず。左らばこゝに此神髓のみに據て活動する一種の宗教團體を起さしめよ。諸宗の神髓は一如なり、然に其間一も神髓のみに據て立つものなく、之に雑多の教法と形式とを附與して相争ひ、宗教をして終に混沌たらしめぬ。須らく諸宗の神髓、即ち信神、修徳、愛隣、永生の四條

にて結ぶごころの、吾人の團體に加れよと、是れ吾人の主張なり、而して其の明白なること、恰も日月を見るが如きものあらんごす、之を彼の耶蘇を神なると同時に人なりと辯じ。一方には放蕩息子之の譬喩を説きながら他方には十字架の贖罪説を維持せざるべからざる憐れ矛盾多き基督教徒の瞬昧態度に比す、旗幟の鮮明なる果して夫れ與誰ぞや。

又曰く、然り、汝の主張や明白なり、而して我已に之を了す。然れども道は人を俟て始めて活く、諸宗には崇拜すべき神人若くは如来を有す、耶蘇是れなり、保羅是れなり、釋迦是れなり、親鸞是れなり、日蓮是れなり。然るに汝の唱ふごころは抽象的の道若くは眞理のみ、而して之を活かしむべき人を有せず、果して能く之をして活ける宗教たらしむや否やと。曰く來りて見よ、顧みれば吾人が日本教會を起してより既に五年の星霜を経たり、而して吾人日本教會

員の實驗に徴するに、かの自ら信奉すると宣誓したる四信條をして、空しく道理若くは眞理たるに止めしめず、自ら神に接し、自ら徳を養ひ、自ら愛隣の業に勵み、自ら永生の希望に満ち、彼の所謂靈的經驗の如きに於ても、日々に益々新なるものあらんとす、然而して之を從來の基督教徒に比するも、佛徒の凝固に比するも、其リバイバル的狂熱に於ても敢て遜色あるを見ず。然而して更に之には理由あり、吾人の神を説くや、嘗に神の存在を示すに止まらず、之に附するに、吾人が已に神を信じて受けつゝあるところの靈的經驗を以てし、與に共に此祝福に與れよと勸むるあり。吾人の修徳に於けるも亦同じく然りとす。吾人は嘗に孔子曰く、耶蘇曰くこのみ語らず、更に之に加ふるに吾人が日々學に進みつゝある經驗を以てし、與に共に此向上的愉快を得よと云に在るなり、然而して其愛隣に於ける教理も、永生に關する信仰も、皆之を我身に味ひ、我身に得

而後に説くものとす、豈抽象的の死道にのみ依るものならんや。且つ又た論者は神人若しくは如來の口吻を借らすんば、活ける道を説き難しと成す、是れ已に舊式に屬す、吾人には最早や仲保者を要せず、直に神に行くべきなり、直に神に接すべきなり、吾人もし眞に志學の徒とならば眞に悔改の子とならば、眞に虚靈清心の人とならば、神の靈は直に吾人の衷に來り、天國は直に其處に現出すべし、吾人は已に其實験を有し、其祝福を受く、然則かの或者の懸念の如きものこそ、畢竟論客の空論たるを免かれざるべし。最後に曰く、日本教會の主張の如きは、實に天下の大事業なり、然るに松村等の如きは、抑々何んの恃むところありてか、かゝる大膽の擧に出でしやと、曰くかゝる大業は勿論人力の及ぶところにあらず、又た人智の圖り得べきものにあらず、全く天の指導に依るのみ。神は石をもアブラハムの子とならしめ給ふ、若夫れ神命なりと

の確信だにあらば、たごへ此山に命じて、海に移れと言ふとも亦た成らん、吾人不肖固より恃むべきものあらずと雖ども、只だ夫れ神の指導の下に、此大事業を成就すべきを確信して疑はざるのみ。吾人を愛し給ふ天父は、常に吾人に告て宣はく、汝等は只だ無私なれ、無慾なれ、虚なれ、空なれ、左らば吾れ吾が靈を汝に濺ぎ、汝をして、地上に於ける吾が使者たらしむべし、汝を活ける供物として吾に献せよ、而て一死以て此の大業に當るべし、左らば同志同情者は必ず雲の如く天下に起らん。汝は保羅の如く、海の難、山の難、同胞の難、而して遂にはニロの剣下に横はることあるも亦た未だ知るべからず、然れども只夫れ吾れを信じて進め、汝は吾が選びたる器なりと。於此乎吾人は弱きときに強しとの妙諦を悟し、勇氣益々加らんとす。笑ふものは笑へ、嘲るものは嘲るべし、ナザレの耶穌すら、狂人と思はれしことありき、況んや不肖に於てをや。一呼天

地に通じ、一吸神殿に入る、彼れ成敗を地上の人間に托するもの、如きは、與に神秘的大業を語るに足らざるなり。

舊人と新人

使徒保羅、以弗所人に送る書に曰く、

汝等風に習へる舊人即ち人を惑はす惑の爲めに壞らるるものを脱ぎ、又汝等の心の靈を新にし、神に象りて眞理の義と潔にて造られたる新人を衣るべし(エペソ書四ノ二十二—二十三)。

舊人とは宗教を信せざりしときの人を謂ひ、新人とは宗教を信せし後の人を謂ふ。今舊人の行爲思想と、新人の其れとを比較し、こ

に舊人に新人との別を描かんと欲す。

舊人の目的は、此世の榮華に在り、こゝを以て財寶を積み、高官に上り、玉殿に坐し、錦衣を纏ひ、美味を食ひ、愛妾を置き、周圍よりお結構のお身分なりと羨やましがらるゝを以て無上の幸福と爲す。

新人の目的は、精神の快樂に在り。こゝを以て財寶を好まざるにあらずと雖ども、不義巧兇惡辣の手段を以て財寶を蓄ふるものを羨まず、寧ろ此等の人を指して、卑しむべく、憫れむべきものと爲す。高官に上るを祝せざるにあらず、而かも其身其位に適はざるときは却て之を以て恥づべきことゝ爲す。玉殿錦衣これ何物ぞ、ソロモンの榮華も百合花の一にだも及ばざりしにあらずや。然而して若夫れ美味を食ふと謂と雖ども、壓き來れば、労働者の澤庵茶漬にも如かざるを覺らん。愛妾を置いて楽しむと謂ふことも、首を回らせば、其

背後に妻女や老母の嘆き悲みつゝあるを見ん、凡俗は我れを羨やむべし、婢僕は拜伏すべし、而かも識者は我れを笑ひ、我れを憫れみ豚の如く、猿の如く、劣等なる人種として、我れを輕蔑しつゝあるを知るべし。

舊人は神を信せず、永生を信せず、こゝを以て、宇宙間、己れを以て最上のものとし、墓場を以て最後と爲す。然れども人や最上のものにあらず、是故に其力の及ばざるとき、其智の足らざるとき、人より誤解せらるゝとき、其他疾病、艱難、不時の災禍に出會ふときには、苦悶、煩絶、訴ふるところを知らざらんとす。又た若し臨終近きに在りと聞くときには、其醜態見るに堪へざらんとするもの、比々然り。更に舊人は「受くるより與るは幸福なり」との宗教を信せず、こゝを以て愛隣の快樂を知らざるなり。頸には金造の頸環を懸け、指にはダイヤモンドの指環を拵め、頭に日月の光を輝かし、五體に

眩目き錦繡を纏ひ、世人より羨やましく眺めらるゝを以て、人生無上の快樂と爲す、而して虚榮の醜に堪へざるものあるに氣着かざるなり。彼等は修徳即ち精神の修養に志ざさず、只夫れ肉體の快樂をのみ是れ求む、こゝを以て、官吏は爵祿をのみ是れ念じ、商估は金儲をのみ是れ思ひ、婦人は芝居、淨瑠璃、若くは衣裳の談話にのみ現魂をぬかし、貴族は先祖の脛を嚙りて上流を氣取り、嘗て下民に同情を表せず、要するところ舊人の世界は、虚榮と禽獸心と貪慾との管轄に屬したるものなりき。

然るに信者即ち新人は最早や其間より脱出せしものなり、其事るところのものは最早や悪魔にあらずして、至善、至美、至愛の神なり、其快樂とするところは、最早や肉體にあらずして精神なり、其思想行爲の舊人と異なるものあるや知るべきなり。彼等は墓場を以て最後となさず、乃ち永生を確信す、其常に希望に満つるや知るべ

きなり、彼等は修徳に志し、進んで愛隣の主義を實行せんことを期す、其虚榮的自利的の舊人と、其行道を同ふせざるや論なきなり。之を要するに、人一たび我が宗教を信するときには、其思想行爲全くこゝに一變す。然而して己に新人となりて、己れが舊人たりしときの行道を顧みるときには、慚愧に堪へず、根顔に堪へず、之れと同時に感謝の念起り來りて、彼れ保羅の如く「我若し傳道せずんば禍也」と呼ばざるを得ざるに至るべし、是れ理論にあらずして實際なり、凡そ眞正の信者たらんものは、皆此の經驗を有するものとす。吾人は彼れ哲學的に宗教を説くものに與みせず、寧ろ此の宗教的經驗を説て、斯の天國の人たらんことを勸むるものなり。

宇内の二大癖物

米のルーズベルトと獨のウヰルヘルムとは、目下の宇内に於ける二大癖物なり。一方には日本に大同情を寄せて、公けに桑港の當局者を叱咤し置き、他方には其の黨を引見し「お前の謂ふ所尤もなり、必ず其通り爲すべし」と誓ふ。一方にはどこ迄も日本の味方の如く見せかけ、他方には艦隊を繰り出して「狐癩の奴め、グヅグヅ云はれぞ」と威嚇す。我日本を愚弄し去て痛快と謂ふべし。

南阿の役には英にからかひ、日露戦争には日本にからかひモロツコ問題には佛にからかひ、しばしば尻しほみ爲したる経験あるにも拘はらず、今や又バルガン半島に其惡戯の手を伸ばして、歐洲の天地を掻き混ぜ、更に事の我れに非なるを看るや、「我れは存せぬ知らぬ」と、空嘯く。癖物の眞面目や躍然たり。然れども易に曰はすや、人を弄する勿れ、人を弄す徳を損すと、到底ワシントンウエリントンノ類にあらず、畢に天下の怨を惹かん。

哀れなる風潮

目下都下に流行する雑誌を見よ、皆相競ふて貴顕、學者、政治家、富豪家等、世間知名の士を、二號活字で標榜し、曰く何侯何伯、曰く何士何將、曰く誰某と、大抵は同じ人の名前を連ね、無暗に禿頭や、古物や、流行子の糟魄を有難がりて、大得意、大満足を表しつあるもの、如し。秋風颯吹く今日、轉た哀情を感せずんばあらず。人已に過去を語る様になりてはお仕舞なり。青年已に老人の言論や

成功談に垂涎する様になりてはお仕舞なり。いよく大活動を宇内に演ずべき我日本の後繼者にして、卑屈此くの如しとせば、日本の前途や寒心すべきものあつて存す。

不動心

心を動かさざるに道あり乎。曰く有り。我れ善く吾が浩然の氣を養ふ、敢て問ふ、何をか浩然の氣と謂ふ。曰く言ひ難し、其氣たるや、至大至剛、直を以て養ふて害するなければ、則ち天地の間に塞らる。又曰く、吾れ嘗て大勇を夫子に聞く矣、自ら反みて縮からずんば、禍寬博と雖ども、吾れ惴れざらんや焉、自ら省みて縮からば、千萬人と雖ども、吾れ往かん矣と。是れ孟子の言なり。

保羅も亦た腓立比人に書を贈りて曰く、爾曹萬事について、敵に驚かさるゝこと勿れ、凡そ敵に驚かさるゝは、敵には亡の徴、爾曹には救の徴なりと。

孟子は到るところに用ひられず、保羅は行くところに迫害せられぬ、而かも仍且つ其心を動かさず、我れ善く吾が浩然の氣を養ふと謂ひ、更に敵に驚かさるゝこと勿れと警しむ。吾人不肖なりと雖ども、亦た斯の二賢者を學ばん哉。

願れば、今や我宗教界は、方に亂世の時に際す。各宗各派、各々境を護し、兵を擁し、孫吳を用ひ、蘇張を馳せ、偏へに我身を利せんことをのみ是れ念ず、此時に當り、王道を説て、思想界の天下を統一せんと欲するものは、是れ我黨の徒に非ずや。今や上流は無宗教に陥り、下流は迷信に溺る、而して大政治家シーザーの如きすら、全く死後の存在を信せず、人生は快樂のみ、飲まずんば還た奈何と

獨語す。古來道を説きしものなきにあらず、ソクラテス即ち是れなり、而かも今や其跡殆んど絶へ、都市の中央に「知らざる神」の祭壇を起して、諸々の迷者を之に聚む。此時に當りて、日夜天幕を編みながら、猶且つ時を得て、アレオ山上に眞神を説き、戲笑せらるゝが中にも、遂にデオヌシオを虜にせしもの、是れ我黨今日の境涯にあらずや。

左れば吾人は孟軻と其志を同ふし、保羅と其跡を同ふすると與に更に其不動心をも同ふせざるべからず。王侯に説くも用ゐられず、有司に謀るも顧みられず、今の時に當り吾を措て夫れ誰れぞやと傲語すれば、諸友皆哄然として之を笑ふ。海の難、川の難、盜賊の難、同族の難、更に幾回となく縲綽の難に遇ひ、ニローの劍に斃るゝをも厭はず、猶且巍然として其心を動かさず、我れ善く吾が浩然の氣を養ふと云ひ、更に敵に驚かさるゝ勿れと警しむ。何等の豪懷ぞ、

何等の雄姿ぞ。

蓋し惟ふに心を動かさざるものに三種あり。一は決死の覺悟にて動かざるもの、二は道を踐んで動かざるもの、三は神に頼りて動かざるもの、即ち是れなり。

歴山王のヘレスポンドを渡りて、波斯軍を撃つや、猪突奮進、千を以て萬に當り、九死に一生を賭するにてありき。信長の意を決して義元を撃つや、金扇を翳して立て舞ひ、人生古より誰か死なからんと謠ひ澄したりしとかや。然而して家康の信玄に追はるゝや、門を開て之を迎へ、所謂旌旗不動陣營靜の度胸に出でぬ。是れ皆死を決して動かざりし例證にあらずや。

ソクラテスは毒杯を飲て、靜かに其死を待ち、今や將に絶命せんとして、俄かに其弟子クリートを呼び、「クリートよ予れエスキュラピアスに一羽の鶏を借りて、之を返すことを忘れたり、汝子が爲め

に之を償へよ』と言ひ終り、悠々餘裕を示して靈界に去れり。耶蘇は十字架に懸りながら盜賊を諭し、前に立てる弟子に其母を托し、更に神に向ふて己れを刑するもの、罪を赦し給はんことを祈り、從容逼らず其靈を渡しぬ。然而して孔夫子は窮すれども濫せずと叱咤し、莊周は貧すれども憊せずと高嘯せり、是れ皆道を踐んで動かざるもの、例證にあらずや。

然則神に頼りて動かざるもの、例證は如何、曰く、維新の際、井上聞多と大隈八太郎の兩人、朝命を奉じて、長崎のキリストタンを彈す、中に妙齡の一女子あり、靜に兩人に向ふて問ふて曰く、妾や已に永生を神より受く、死や毫も懼るゝところにあらず、而かもお役人様にお尋ね致します、我等は常に善事をのみ是れ爲さんと心掛け、未だ曾て悪事を爲したることを覺え侍らず、神に事へて人を愛することが、何故にお上の御法度に候や、今生の際に之を承り度

候にこそと、一には死を決し、二には道を踐み、實に大丈夫も及ばぬ態度を示しければ、涙脆き聞多は、畢に其席に耐へ得ず、八太郎に向ふて、俺は此様な役目は御免だと、其後一切裁判の席には侍せざりしと云ふ。由來神に頼りて動かざるもの皆概ね此くの如し。彼れ決心の覺悟にて動かざるもの之を豪傑と謂ひ、道を踐んで動かざるもの之を聖賢と謂ふ、然るに此れや必しも英雄の資を有せず、將た聖賢の徒にもあらず、而かも神に頼りて動かざるところには、正に聖豪に類するものなくんばあらず。

吾人は必ずしも聖豪を學ばずと謂はず、然れども唯り神に頼るの信仰のみより之を謂ふも、吾人の心は已に不動の地に在るものとす、即ち吾人は神の愛子にして、神の恩寵は常に吾人の上に在るを確信して疑はず、亦た何をか懼れ何をか憂へん。吾人は歴山、家康、孟子保羅等の後に従ひ、善く我が不動心を養はんことを期す、然れ

天地人
ごも若夫れ之を借越と謂は、吾人は彼れ一小女の例を引て、我心
魂のあるところを告げんと欲す。左らば困厄も來れ、讒害も來れ、
飢寒も來れ、縲紲の難も亦た來れ、吾人は只だ我が善き戦を闘はん
のみ、只だ我が馳場を走らんのみ、亦た何をか避忌せんや。悠々た
り天地の事、畢竟、神の手中に存す。

天命を知る

予や不肖固より夫子に比すべくもあらずと雖ども、五十にして始

めて天命の如何を知れり。顧みれば予や十有二歳にして家を出で、
四方に流寓すること六七年、其間人生問題にも觸れざるにあらず、
國家の安危にも激するところなきにあざりき、然れども要するこ
ころは、自己一身の功名利達を念するより外、其他天地間に何物を
も有せざりしなり、然るに其後間もなく横濱に赴て、基督敎信者と
なり、人生の目的たる、嘗に自己一身の功名利達を念するに止まら
ず、上、神に事へ、下、人に竭さるべからざる大義を知り、爾來
予は神と人との爲めに、斯身を献せんことを覺悟せり。然り然れど
も其れ唯だ此の覺悟を爲せしのみ、未だ何を以て斯神に事へ、何を
以て斯人に竭さんかの問題を決すること能はざりき、否、予は牧師
こそ其れなれと感したることもありき、教育家こそ其れなれと感じ
たることもありき、著述家こそ其れなれと感したることもありき、
更に又た時勢に激し來るや、政治家こそ其れならん乎と、大に我心

を動かせしことも亦た之れなきにあらざりき。然れども近時五十に至るに及んで始めて天命の如何を知れり。

顧みれば予は五十年間、種々の境遇を経過せり。頑是なき小童より、窺色喫飯の居候となり、亂暴殺伐の壯者より、跪坐捧禱の悔改者となり、或は腦を疾んで死を祈り、或は進退に苦んで自殺を計り、或は懷疑に陥りて、暗黒界の荒野に迷ひ、或は啾々の吟に由りて活達自在の天地に出で、或は宣教師の冷遇に激し、或は田舎信徒の温情に喜び、或は第三の天に上り、或はカペナウムの街に落ち、或は得意の境に逍遙し、或は落膽の淵に沈み、實に變轉極りなき境遇を経過せり、然り然れども予は嘗て悔改して、神に斯一身を献ぐべしと誓ひしより以來、未だ一日だも神への祈禱を絶ちたることあらず、其間幾千日なるを知らずと雖も、未曾て三度の食事毎に、神への感謝を絶ちたることあらず、顧みれば宗教界に於ける予の先輩

たる某々は神を離れぬ、予より聰明にして學者なる某々は、今や却て宗教を嘲ふものとなりぬ。然而して予の同輩たる某々の如きは、早くも祈禱を忘るゝものとなりぬ。然るに予や鈍愚彼等に及ばざるの身を以て、今尙ほ神に連なるを得ることは、何等の感謝ぞ、何等の強意ぞ、予の境遇は變じたりき。然れども予の宗教心は動搖せざりき。予の思想は變じたりき。然れども予の祈禱は一日も絶へたることあらざりき。於此乎予は知る、天命は遂に予をして宗教界に働かしめ給ふに在ることを。

予の日本教會を起すや、敢て有力者に待つところありしにあらす、若しくは自己の力に恃むところありしにもあらす、唯だ神の命を奉せしのみ、神が予を愛し予を導き、予に命じて、いよ、我身を宗教界に投せよと宣ふに由るのみ。予は之を疑はんと欲して疑ふ能はず、信せざらんと欲して信せざる能はず、而して感激の情禁する能

はざるものあるのみ。然則予の天命や他ならず、只夫自己の弱きを願みず、神に頼て宗教界に投ずるに在るのみ。耶蘇曰く、若し芥子の信あらば、此山に動きて海に入れよと命ずることも亦た成らんと。バプテスマのヨハネ曰く、神は此石をも能くアブラハムの子と爲し給ふ。ポーロも亦た曰く、神は此瓦礫の器にだも聖靈を盛り給ふ。孔子は曰く、天徳を予に生ず、桓魋其れ予を如何んと、予や不肖固より彼等に擬すべくもあらずと雖ども、其の天命を確信するに於てや即ち一也。

人或は謂はん、我れ汝の所信の眞面目なるを信ず、而かも畢に何事をも爲す能はざるを知る、神は自ら助くるものを助く、汝の學力汝の才能、汝の人格を以て、豈何事を爲し得んや、其空想に出で、失望に終はるべきは、炳乎として火を睹るよりも明かなりと。曰く然らず、凡そ宗教の如き、神聖の事業に従事するもの、要訣は、學

力にもあらず、才能にもあらず、將た其堂々たる人格にもあらず、夫れ只だ虚心と無私に在るのみ、凡そ神の力を領けんと欲するものは、其學に頼るべからず、其力を恃むべからず、將た其人格をも謂ふ勿れ、此等は却て領べき神力を妨げんのみポーロ曰く吾れ弱きとくに強しと、此れ其消息を洩すものなり、只だ其れ神前に跪伏して其の祝福を仰がんのみ、然而して若夫れ天命已に我れに在りと信する以上は、如何に事、意の如くならず、物、我れに逆ひ來ることも、決して喪信すべきにあらず、徹頭徹尾、何處までも神に任せて進まんのみ、孔子曰く固なく必なく我なしと、耶蘇曰く、我心を成さんごにはあらず、御心の儘になし給へど、然而して其皮相觀より之を謂は、孔子は空しく周公を夢みて終生畢に用ゐられず、耶蘇は到處に嘲笑せられて、當時の歴史にすら記せられず、果敢なく十字架の上に死せしものごす、何んぞ其天命を號呼したる所信と相距る其れ

遠きぞや。遮莫是れ即ち天命の在るところなりき。見よ、孔子は東洋に其感化を遺し、耶蘇は宇内に其教を布きぬ。吾人不肖固より彼等に及ばずと雖も、學ぶところの心事は即ち是れのみ、若夫れ己れを空うして神を信じ、死を決して命を奉せば、山をも動かすべく、石をも化すべし、然而して縦令ひ刑厄に遭ふて終らんも、是れ雖て斯道復活の順路たるべし、決して一歩だも退くべからず。

嗚呼、主よ、顧みて我身を想へば、顛沛の間にも我を守り、養豚の際にも我れを憐み、我恥を掩ひ、我罪を赦し、我れをして絶へず、爾に祈らしめ給ふ、爾の愛は深い哉、爾の徳は高い哉。嗟呼神よ、我れは已に我有にあらす、只だ爾の命のまゝならんのみ、たとひ火の中、水の中なることも、我れは爾の意に従はん、爾の與へ給ふ毒杯は、我れ甘しとして之を飲まん、爾の授け給ふ荆帽は、我れ榮として之を冠せん、ゴルゴダの山、我れの避くるところにあらず、陳蔡

の野、我れの厭ふどころにあらず、只だ爾の命を受て、今日の人を思ふのみ、今日の世を憂ふるのみ、冀くは我等をして、盲者に見せしめ、聾者に聞かしめ、跛者を立たしめ、貧者に福音を傳へしめ給へよ。否、我等は已に爾に依りて世に勝てり、悠悠逼らず、旗を千載の後に樹てん哉。

達人の大觀

如何にしても解し難きは、諸宗教の自尊排他主義にぞある。基督

教は曰く、基督の十字架を信せざるものは、皆盡く火の熄へぬ虫の盡きぬ地獄の刑罰に與るべしと。回教徒は曰く、若夫れコーランに従ふて、諸々の戒律を守るにあらずんば、賢愚俱に亡ざるべしと。然而して儒者も佛者も將た神道家も皆各々其旗を擁し、我こそ道の本家なれ、我こそ天の直傳なれと稱し、互に自眞他僞と語り、其醜の、態度にして、彼れ漠然道を説て、取り留めのなき無主義即ち曖昧家の如きは、卑怯未練の當世兒にして、與に古代の風骨を語るに足らずと爲す。實に氣の毒なる人々なりと謂はざるべからず。吾人に主張なきにあらず、信神、修徳、愛隣、永生の四眞理を捉へ來りて、諸教一如、諸道一歸と喝破するもの即ち是れなり。然而して吾人の之を主張するや、決して卑怯の餘に出でたるにもあらず、又た好んで曖昧の態度を取るにもあらず、寧ろ大膽に、明白に、率

直に、今日の諸宗教に向て、其謬見を指摘し、之れが螺贏となり、之れが與奪者となり、基督の所謂、「予は豫言者を棄つる爲めに來らず、却て之を成就せんが爲めなり」との擧に出んとするものに外ならず。

人或は謂はん、然則汝は何んの權威を以て之を企つやと。曰く時の權威即ち是れなり、彼れ釋迦たり、耶蘇たり、將た孔子たるもの孰れも皆時と處を異にして出で、而して其時と處に隨て法を設け教を説きたるもの、歸するところは信神修徳愛隣永生の四眞理を唱道したるに外ならず、釋迦は耶蘇を知らず、耶蘇は孔子を知らず、是故に其所説に於ては、互に負ふところあらざりき、然れども其天命を自覺したる上に於ては即ち一なりき。而して天帝より之を視れば、齊しく皆愛子なり、弟子なり、使者たるに外ならず、天帝は印度に釋迦を遣はし、支那に孔子を遣はし、猶太に耶蘇を遣はし、時

と處に隨ふて其使命を果させ給ひしなり、然則彼等は皆一より出で、一に歸すべきものとす、焉んぞ互に相悖ることあらんや、焉んぞ互に相争ふことあるべけんや、想ふに今日の天上に於ては、釋迦孔子、耶蘇等皆互に往來し、遙かに下界を眺め見て、其門徒等の大觀的悟道に入り難きを慨嘆し、何日までも困つたもので御座ると、互に語りつゝあるなるべし。左らば諸君よ、今日は最早や或る時代と或地方に局して説きたる釋迦、孔子、耶蘇の法教に拘束せられず、寧ろ其使命の眼目に一致すべき時にあらずや。否、靈覺一番、直に其來るところ、其指すところに赴き、彼等と同門たるべきにあらずや、誰か謂ふ、吾人は畢に釋迦、耶蘇、孔子等に及ぶ能はずと、然り、其人格に於ては、或は彼等に及ぶ能はざるべし、然ども其見聞の廣且つ大なる點に於ては、彼等は畢に吾人に及ばす。彼等は印度、猶太、支那等の一部に局し居て、世界の大を知らず、人類全體の歴

史を知す、萬物進化の事實に味く、學術の進まず、發見の乏き未開時代の人たるに過ぎず。然則如何に聖人たり至人たることも、畢に今日の吾人に及ばす、是れ吾人が時の權威を稱道する所以とす。予れ一日第三の天に上る。時に釋迦、孔子、耶蘇等皆天帝の側に侍す、予末座に屈して之を窺へば、天帝遙かに下界を指し、願みて彼等に告て曰く、見よ彼處には釋迦汝の旗を擁して題目を唱ふる民衆あり、此處には耶蘇汝の旗を翻へして威勢よく進み來る大群あり、而して更に一段高き處には、孔子汝の旗を樹て、端坐襟を正す一族あり。我は皆彼等を愛す、彼等は齊しく我孫なりと。於此乎彼等各之を眺むるに、其旗や如何にも鮮明なり、而して其人や頗る眞面目なるもの、如し。然れども其間天帝を拜するもの極めて尠なく、多く皆其旗を拜し、かねて釋迦、孔子、マリア等の肖像、若くは經典を拜するものあるのみ。因て彼等は慚愧に次ぐに憤慨を以てし、

互に天帝に向て謝して曰く、衆生は畢に教へ易からず、而も皆是れ弟子の罪なり、恐懼措くところを知らずと。天帝笑て之に答へて曰く、更に妨げあるべからず、汝を拜するは即ち吾を拜するなり、吾れ豈汝等を嫉まんや。而かも汝等更に見るべし、今や微々として汝等の眼界に映じ難きも、東洋の一角、日本の一隅に當り、汝等の後を襲ひ、汝等の志を紹ぎ、爾等が局部に始めしものを、宇內的に完成し、汝等の舊時に説きしものを新時に應用し、汝等をして其終あらしめんとして、所謂一貫の大道を天下に呼號し始めたるものあり、而て其人格に於ては固より汝等に及ぶ能はず、即ち汝等に及ぶ能はざるが故に、彼等は極めて謙遜に「我等を見る勿れ、我等に聞く勿れ、只だ夫れ天父を見よ、只だ夫れ天帝に聞け」と叫び、汝等の意も亦た此處に在るぞと告げ、以て廣く汝等の旗下のものをも應かんとす、汝等も亦た以て感むに足る歟と。於此乎彼等目を張りて之を望めば、

如何にも微々たる小群なるも、「道會」と明記せる大旗を擁し、其衆の皆天帝に向ふてのみ拜するを眺め、嗚呼我志將に成んとす、神ぞ獨り褒むべき哉」と歌ひ出すや、天外聲あり、其聲雷の如く、曰く、達人は須らく大觀すべし、偶像教はいよく亡びぬ、封建の世はいよいよ終れり、而して今後は只だ天帝の親政あるのみと。予れ於此乎、愕然として首を擧ぐれば、是なん南柯の一夢なりき。

是れ我が任也

農相英國より歸り、蹴然として我實業家に警告して曰く、今や我
 國は、清を破り、露を挫き、威力海外に振ふ。然れども我が商業道
 徳の缺乏は、彼の國の民をして、危懼の念に禁へざらしむ、彼等は
 予に向ふて、商業家諸君の不信不實を説き、予をして赧然其坐に堪
 えざらしめたり。予はありふれたる慷慨談を爲すものにあらず、又
 た宗教家の口吻を學ぶものにあらず、只だ我日本の前途を想ふて

實に寒心措く能はざるものありと云々。某も亦近時、海外漫遊の途
 次より、書を我が新紙に飛ばして曰く、外商には皆自國を代表して
 起んとする概あり、而かも我邦人には自個以外に何物もなし、外商
 は宇内を相手と爲すも、我邦人は兄弟内に相欺く。更に滿洲若く
 は朝鮮より歸來せしもの、言に曰く、滿洲は掌中に落ち、朝鮮は腹
 中に葬りしも、我邦人の不道德、不謹慎、不體、不埒は、到底彼の
 民を服せしむるに足らず、玉逸し、腸壞れて、馬鹿を見んこと遠き
 にあらず。更に又た米國に在る我黨の士は、淋漓の筆を揮ふて、
 深憂の情を摠べ、在米兄弟のいよ／＼墮落して、いよ／＼國辱を曝
 しつゝある近況を報じ來れり。此等は新き問題にあらず、而かも我
 國今日に至る迄、之れに向ふて、何等の救道をも講ずるものなく、
 依然ありふれたる慷慨談にのみ止り、未だ解決の端緒だも見出すこ
 と能はざるにあらずや。

識者皆嘆じて曰ふ、今回の洪水は全く道德問題に屬す、堤防の崩潰は、道德問題なり、其工事に不埒あるを以てなり。水流の汎濫は道德問題なり。其濫伐に基するを以てなり。大河の横溢は道德問題なり。其埋立に疑問あるを以てなり。又曰ふ、社會の紛擾も道德問題なり、黨員の離合も道德問題なり、而して新紙の三面記事も亦た道德問題に屬せざるはなしと。其れ然り、而かも未だ此れが救道を講ずるものなく、之れを嘆ずるものは獨り嘆じ、之れを嘗るものは獨り嘗るのみ、而して單に空嘆空罵に歸するを見る。渡邊國武先生は其道を説きぬ、床次局長も其意見を述べぬ、後藤遞相も亦た其所懐を吐きぬ、而していづれも皆之を我が道誌上に紹介せり、然れども未だ何等の解決をも見ず、混々たり沌々たり。

於此乎吾人は宣言す、夫れ如上の問題は政治問題にあらず、實業問題にあらず、即ち道德問題なれば、直接之れが責に任すべき者は

教育家と宗教家とあるのみ。薩藩武を講ずれば健兒内に動き、長藩文を勵ませば、智謀の士雲の如くに起れり、那翁が歐洲を横行せしとき普魯西は朽木の如く其前に碎けたり、而かも五十年の後、佛は獨乙の敵にあらざりき、之れ皆教育の如何に由る。吾人は我國の教育家諸君并に我文部省に望むところ少々にあらず、然れども吾人宗教を以て任ずるものは、他人を責むるに違あらず、正に自己の責任を負ふて立たざる可からず。政治界が腐敗し、實業界が墮落し、教育界が枯死するも、吾人は其責に任せず、然れども若夫れ宗教界の無勢力に至りては、吾人は男子らしく其責に任せんと欲す。左らば儒來れ、佛來れ、神道來れ、耶蘇教も來るべし、吾人は諸君を異端と觀せず、其神を拜し、心を治め、人を愛し、永遠を望むに於ては、吾人の所信に違ふことなし、唯夫れ吾人は名を求めずして實を求め、其説の盛ならんを願はずして、其感化の大ならんことを冀ふ、是故

に諸宗教家諸君、庶幾くは吾人と共に奮勵一番、其腰に帶して起ち、今や識者が慷慨に沈んで我國の前途を憂る時、政治家が海外に對して、我國民の覺醒を促すの時、是れ我が所任なりと言明し、狂瀾を既倒に回すの壯舉に出でしめよ、若夫れ教會振はず、舍塾興らず、寺院敗れ、社祠荒れて、人の之を顧みざるあらは、之を澆季に歸するなく、反りみて之を我身に覓めよ、人心の光明を慕ふや、古今異なるなし、要は今日の世に、電燈を興るや、ランプを興るや、抑々猶ほ暗燈を興へつゝあるや如何を顧みるのみ。道元無爲只在人は、勿論なりと雖ども、織女も石に化し、堅巖も矢に穿たる、要は精神如何に在り。於此乎、諸君或は謂はん、汝も亦た口辯のみ、請ふ腕より始むべしと。曰く生命は成長に在り、活動は不退に在り、涓々の水、炎々の火、天高く海濶し。

吾人の要求

一世に屈して萬世に伸ぶ、之を眞の偉丈夫と謂ふ。殊に宗教家に於て然りと做す。鳳鳥至らず、河圖を出さず、吾れ已んぬる矣乎と大息したるも、天、徳を予れに生ずと確信して、大業を千載に期したる孔子の如き、其弟子に賣られ、國敵に渡され、當時の酷刑に處せられながら、猶且つ「吾れ勝てり」と叫びたるナザレのイエスの如き、更に毒杯を舉て後世を祝したるソクラテスの如きは、其最たるもの

也。

吾人は梯するも彼等に及ばず、而かも學ばんと欲するところ彼等に在り。歐洲を席捲したる那翁の洪業も、セント、ヘレナの露と消へ、歐亞を攫撃したる歴山の壯舉も、電光の如く過ぎ逝けり、英雄の聖人に及ばざるところ、蓋し焉に存するなり。今や眼を放て宇内を視るに、獨にウイルヘルムあり、米にルーヅベルトあり、那邊に雲飛電激の高壓手段を揮ひ來るべきか、亦た未だ知るべからざる者あり、而も宇内の宗教界に於て彼等に匹敵すべきもの果して誰ぞ。ルーテル、カルヴァインの徒は遠く去り、ピーチャル、チャンニングの英姿亦た已に見るべからず、今の時に於て古聖人の跡を窺ふものは果して誰ぞ。近く之を今日の日本に徴するも、局部の英雄は之れなきにあらす。而かも宇内を睨んで動かんと欲するものは果して誰ぞ。宗教界に於ても亦た然り、一時の人物は之れなきにあらす、而かも千

載を達觀して、不朽の大道を天下に樹立せんと欲するものは果して誰ぞ、蓋し之れあらん、我れ未だ之を聞かず。

海老名彈正君は夙に偉物と稱せらる。其長髯を撫して壇上に立つや、威風堂々犯すべからざる概あり、其龍騰の勢を振ふて、其虎嘯の辯を鼓するや、人をして雷動風驅の下に在る心地せしむ。實に或人の評せし如く、天下の一品と謂はざるべからず。其思想の深遠にして奇抜なる、能く高等の學生を悦ばせ、其慨世の氣に満ちて、憂國の情に溢るゝや、能く儒夫をして奮起せしむ。然而して海老名君は雄辯と思想と氣概とを以て有名なるのみならず、更に進んでルーテルの跡を慕ひ、第二の宗教改革を以て自ら任じ、「ルーテルを往古に求めずして今日に求めよ、ルーテルこゝに蘇へれり」と叫びたることありき、其古聖人古賢者の心を以て心と倣したるや知るべきなり。其れ然り然れども海老名先生終に何物をか獲たる、先生は確かに日

本の基督教界に向ふて、一種の光明を與へたり、一種の生命を入れり、一種の新意義を附したり、先生は所謂新神學を以て、我日本基督教界を覺醒したる最大動力なりき。横井君前に之を唱へ、金森君後に之を紹きたるも皆物にならず。人を活す能はずして自ら死せり。此時に當りて海老名君出で、遂に辯と筆とを以て之を成就せり、其業や偉なりと謂ふべし。其れ然り、然れども敢て問ふ、先生の教會や今如何、多士の濟々たる我れ之を聞く、然れども先生若し今日に死せば、其後を襲ふもの抑々誰ぞ。古來より英雄に嗣ぐに英雄を以てすること難し、唯り之を海老名先生に望むべきにあらず、然れども海老名先生の理想的教會は、之を先生の一代に限り、其後に及ぼす能はずとせば、抑々亦た心細き次第にあらずや、況んや本郷教會の外に同主義、同抱負、同組織の教會たる、抑々幾千幾百あるや、若夫れ之れ無しとせば、海老名先生は單に一時の言論家となりて終

らんのみ、而して遂に古聖人古賢者の跡を襲ふこと能はざらんとす、豈惜しからずや。

植村正久君は偉大なる頭腦を有す、和漢洋共に通せざるなく、其學の淵泉溥博なる、吾人の間に其匹敵を見ず、其辯や呐なり、然れども淳々と説き、懇々と諭し來るところ、春雨の物を濡す如く、慈父の愛女に向ふが如し。植村君若し無學ならば、老人の繰言として笑ひ去るもの多からん、然れども植村君を大學者と知るものは、其學に對して益々傾聴の價値を見る。先生は勉めて舊來の神學を保持し、海老名先生と相對して下らず、一時雜誌上に論戰を開き、新舊兩神學界の二傑と稱せられき。植村先生の神學如何、未だ詳に之を知るを得ず、然れども彼れ贖罪説と耶蘇の奇跡降誕説とは、想ふに今尙ほ持續せらるゝなるべし、斯人にして斯説ありとは、吾人の怪訝に堪へざるところなりと雖ども、先生や學者なり、而して學者な

るが故に、身自己は無學なるも尙ほ且つ先生を信じて其説に服し、却て我黨を指して學識と思想に乏しき突飛者なりと笑ふもの多からんとす。そは兎も角も、先生や實に一代の傑物なり、其日進の學術と新開の神學に對抗して屹立し、今や海老名先生を凌駕する勢あり。先生や英雄の資に恥ぢず、實に多角的の人格を有す、是故に或者よりは全然惡物と確信せらる、然れども其眞に恩顧を受けたる或者よりは之を觀れば、先生や天使の如し。情に脆く、義に勇み、悲しむものど與に悲しみ、喜ぶものど與に喜ぶ、先生が今日日曜毎に數百の大衆を吸引し、毎月三十回以上の集會に臨み、先生の盛徳と教訓とに感激して献金するもの雲の如く、富士見町教會の發展や昨今驚くべきものあり、然而して其教會員の中には、博士あり、高官あり、富者あり、貴者あり、今や我全國を通じて、先生の教會に匹敵すべきもの蓋し一もあらざらん、先生の業や炎々たり隆々たりと謂はざ

るべからず。其れ然り、然れども先生の没後斯業を繼承すべきもの果して誰ぞ、豈那翁の洪業と共に歴山の壯舉と與に、消滅すべきものたらずとせんや。

宮川經輝君は、前上の二傑と並び稱すべきものなり。其雄辯に於ては海老名君に譲り、其博學に於ては植村君に及ばず、然れども一般の聽衆に向ふて、其宗教心を促發せしめ來るところには、二傑も三舍を避けざるを得ず。海老名君は一個の説教家なり、植村君は富士見町教會の長宰たるに過ぎず。然るに宮川君は曾に大阪教會の長宰たるのみならず、更に組合教會全體の長宰たり。一百有餘の牧師傳道者を指揮して動くところ、確かに政治家たるの貫目あり。其の時に服せざるものあり、不平を鳴すものあり、鐵拳を豎子の頭上に加ふべしと憤るものありとも聞く、然れども其一度彼れが虎髯の前に出づるや、終に何事をも言ふ能はず、水中に泡沫を吹き、苦面に

嘲笑を甘受して了はるもの、比々皆以て然らんとす、宮川先生の威風や犯すべからざるものありと謂はざるべからず。其れ然り、然れども宮川先生遂に何物をか成就し得たる、進んでは組合教會全體の衰勢を救ふ能はず、退ては大阪教會の一教會に五百の聴衆を引く能はず、三十年間の努力を以て、尙ほ七百有餘の會員を有するに過ぎずとは、抑々亦た盛んならずと謂ふべきにあらずや。加之先生も亦た右の二傑と同型にて、先生の没後には、先生の業を繼で起つものなからんとす、前途洵に心細き次第なりと謂はざるべからず。顧みれば吾人には海老名先生の雄辯なく、植村先生の博學なく、更に宮川先生の猛氣なし。即ち諸傑の長するところ一も吾人に之れあらず。然れども窃に惟みるに、若夫れ強て長するものを吾人に求めば、吾人の劣辯、吾人の無學、吾人の弱質、蓋し此れなるべし。諸傑や傑也、こゝを以て、人の上に立つを知て人の下に就くことを知

らず、人を使ふことを知て、人に事ふることを知らず、其周圍に集り來るもの皆盡く其命を聽て動く者のみ、其事業の一代にして消滅し去らんや、當然と謂ふべし。吾人や下才也、下才なるが故に、己れが手腕力量を恃まず、只だ夫れ主張を天下に掲げて、廣く同志を四方に募り、勉めて己れ以上のものを集收し、衆力を合して、我大目的を遂行せんと欲するのみ。例へば海老名君の下には海老名君以上の雄辯家を出さず、植村君の下には、植村君以上の博學者を見ず、宮川君の下には宮川君以上の猛者を容さず、然れども吾人の下には、否、吾人の間には、既定の宰者なく、自擅の長者なく、唯だ其れ徳と學とに是れ從ふ。是故に吾人の今日に要求するところのものは、吾人の下に就くものにあらずして、吾人の上に立つものなり、吾人に使はるゝものにあらずして吾人を使ふものなり、吾人は陳吳の徒に過ぎず、荒野に叫ぶ聲たるのみ、吾人の事業は、千載を期して成

就せんとするものなり。然則大徳家來れ、吾人は君を仰で尊師とせ
 ん、大説教家來れ、吾人は君の下に謹聽せん、大文章家來れ、吾人
 は不磨の經典を君の手に委ねん、大經倫家來れ、吾人は教會の組織
 を君に任せん、大音樂家來れ、吾人は至情の啓發を君に托せん。其
 他信神の部に於ては、塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙する至人
 を要し、修徳の部に於ては、野より大妙に進み、立志より不踰矩に
 達する真人を要し、愛隣の部に於ては、經世の大材を抱いて、現代
 を救済すべき英傑を要し、永生の部に於ては、こゝに不知死不知生
 の大物を要す、吾人豈之を一人に望むべけんや。況んや今日は宗教
 の革命時期に際す、かれ舊き革袋に新酒を盛んとするもの、姑息彌
 縫、漸く一朝の教壇を終へて青氣を吹くもの、無學を相手に盲者蛇
 の説を吐くもの、夜明けて燈火を點するもの、若くは一時に伸びて
 得々たるもの、一部に屬して揚々たるもの、如きは、數ふるに足ら

す。吾人は奮然一躍、百尺竿頭に一步を進めて、こゝに千載不朽の
 大道を樹立し、之を以て今後の宗教倫理界を統一し去らんと欲する
 なり。事や固より容易にあらず、而かも一世に屈して、萬世に伸ぶ
 るもの、之を眞の偉丈夫と謂ふ。吾人の着眼已に決す。吾人や固よ
 り弱質なり、而かも吾人の弱きところは、即ち吾人の強きところな
 り、皇天の前に伏して祈るものは、自ら誇るべきものを有せず、人
 の爲し能はざるところは、即ち神の爲し給ふところなり。天の斯道
 を亡ぼさざる、豈我が要求を容れられざる恐れあらんや、吾人は天
 の祝福の我黨の上に在ることを確信して疑はざるもの也。

人物三段

近時人物論いよく盛んなり、今試みに人物三段を説かんと欲す。

下段の人物

孔子曰く「如し周公の才の美あるとも、驕且吝ならば、其餘は觀るに足らざるのみ」と。世に才物あり、辯者あり、手腕家あり、人をして其技能に驚かしむ。然ども其技能に誇顔する氣障物は、最も劣等

の人物なり。無暗に歐米を振廻はす新歸朝者、矢鏢に博識を街ふ學者の如きは、是れ亦た驕氣病患者なるを以て、人物としては觀るに足らず。更に吝に至りては、最も人物を下げしむるなり。一廉の才物にして吝家なるものあり、常識に富みたる智者にして、猶且つ吝家なるもの尠しとせず。慈善を説き、公共を論じ、彼れ守錢奴の如きは、氣が知れぬなど高言するものにして、其身自ら非常なる吝家なるあり。實に此吝家のみは、斯人にして此疾ある乎と思はしむほど、豫想外のものなり。其は兎も角も、此吝家ほど其人物の價値を下落せしむるものはあらず、如何なる學者も、政治家も言論家も、一たび此疾に罹るときは、忽ち劣等の人物界に落つ、而して到底衆を率ゆる能はざるが故に、畢に大事を做す能はず。試みに周圍を視よ、一廉の事を成すべく期待せられたる人物にして、往々社會より埋没せられつゝある真相は、此吝家たるが故たらずん

天地人
ばあらず、孔子の言終に吾人を欺かざるなり。

中段の人物

一方より視るときには、驕且つ吝なる劣等の人物にてありながら、何故に今尙ほ或方面の信用を繋ぎつゝある乎、彼の偽善にして腹黒き人物が、何故に今尙ほ一方に成功しつゝある乎、世間は廣きものなりと吾人をして不思議に感せしむるものなきにあらず。然ども此れは無關係者より視たる方面にして、其味方若くは其子分より視るときは、斯驕且吝なるもの、偽善にして腹黒き人物が、往々謙遜にして大氣に、率直にして善人なりと思はるゝ節々なきにしもあらず。彼れは元來自己中心の人物なり、是故に己れの利益たらしめんと欲せば、御馳走政略をも取るなり、人の苦境をも救ふなり、親切に優さしく交はるなり、こゝを以て其の世話に預りたるものは、何處ま

でも其人を慕ひ、其人の爲めに盡さんと欲す、而して偶々他日其人の偽物たるを看破するに至るとも、己に情義に繋がるありて、終に見棄つるに忍びざるもの、是れ其人をして今尙ほ社會に立しむるゆえんとす。尤も其心術より視るときは、下段の人物よりも尙ほ卑しむべきものあり、否、寧ろ惡むべき性質を有す。然れども兎も角も情と義を以て其味方を繋ぎ行く其手腕は、徒に驕且吝なる人物の上在りと謂はざるべからず。

上段の人物

上段の人物とは、修養の結果として、所謂「母意母必母固母我」の域に進みたるものを謂ふなり、驕ならず、吝ならず、心胸朗々、公々明々、春風となり、烈日となり、秋陽となり、清雪と化し、雷雨となり、怒濤となり、猛火となり、垂天の雲と變ずるも、太虚の

獨立自助主義

獨立自尊若くは獨立自助主義は、歐米世界の生命なり。今其の出で來りたる因縁歴史を語るべき時なしと雖も、兎も角も歐米世界には、此主義の活動あるが爲めに、東洋諸國の如く、一人出世すれば、親戚故舊皆相寄て之れに依頼し、其脛を啣り、其血を吮ひ、日夜厄介と無心とを之れに申込み、畢に其人を惱殺若くは疲殺せしむる如き惡風あらず、而して此主義の爲めに、人々に奮發心を起さしめ必死の覺悟を爲さしめ、社會をして日に月に進歩發展せしむ、欽

すべき事と謂はざるべからず。然れども左る代りに個人道徳に缺陷を生じ、親戚の飢寒に泣き、故舊の窮死に瀕するものあるも、彼れは獨立自助すべきものなり、其の之を爲す能はざるは、懶惰の故のみ、奮發心なきが故のみ、自業自得のみと冷笑して顧みず、其世に成功したものに會へば、親戚若くは故舊なりとて、我れより好んで之と交はるも、其世に失敗するものに會へば、親戚なることも、故舊なることも、之れに一瞥だも與へず、偶々來りて助力を請は、獨立自助心なきものは援くるも甲斐なしとて、之れに門前拂を喰はせ、畢に歐米社會の缺點までを學んで大得意となり、日に月に人間界を離れて、動物界に落ちつゝあるを覺らざるもの、今や日本の紳士界に多からんとす。我道會は、東西兩洋の兩端を叩き、其中を執て之を民に用しめんと欲するもの、此際双方の爲め、一喝なからざるべからず。

吾人の敵

吾人に四敵あり。一曰く大臣。二曰く御用商人。三曰く文部省。四曰く新聞記者。

吾人をして奇矯の言を弄すと爲す勿れ、實に痛嘆措く能はざるものあればなり。吾人は義を説き、道を講じ、不肖ながらも精神教育を以て任ずるものなり。然れども到底我力の及ばざるを知れり。吾人の所説は嗤笑せられ、吾人の事業は憫然視せられ、吾人の至誠は

疑はれ、吾人の盡力は、恰も濁浪中に數滴の清水を注ぐが如く、畢に何んの効をも奏せず、吾人をして時に或は失意落膽せしむるものなくんば非ず。何ぞや。吾人の味方の減少するに反し、吾人の敵の益々増大するを以てなり。吾人は信を説き義を講じて曰く、吾人の理想とするところのものは、聖人なり、君子なり、至誠の士なり、かれワシントン視よ、リンコルンを視よ。ピットを視よと。然れども青年は服せず答へて曰く、我儕はワシントンを知らず、リンコルンを知らず、ピットを知らず、然れども桂總理を知る、田中宮相を知る、外國に於ては、至誠の人聖賢の徒にして、始めて大臣に登るを得ん、而かも日本に於ては夫れ彼れの如し。我れ總理たらば則ち足る、我れ宮相たらば則ち足る、我儕の望むものは成功なり、出世なり、我儕は瘦我慢の腕を撫して道を説く汝等よりも、高位高官に登りて愉快を極むる彼等を羨やむと。斯くて吾人の絶叫は畢に憫

然視し去らるゝなり。吾人は曰く人は勤勉ならざるべからず、正直ならざるべからず、額に汗して働かざるべからずと、而かも青年は笑て曰く、ア、汝は今日の世に處するの道をしらざるものなり。今日の所謂る豪商なる者を見よ、官吏と結び、大臣を擒にし、種々の醜行を敢てして、遂に大を爲せしものならざるはなし。其證據ここに在りと、彼等は已に其秘密を熟知し居るなり、而して吾人の言説には畢に耳を借さざるなり。吾人は曰く否々、不義の富貴は浮雲の如し、たとへ濁すとも盜泉の水を飲むべからず、彼れ伯夷を見よ、たとひ首陽山に餓死せしも、千載の下尙ほ頑夫をして廉ならしめ、儒夫をして起たしむるものありと、而かも青年は其何の意たるを解する能はず、而して曰く、伯夷とは誰ぞや、盜泉の水とは何の心ぞ浮雲の如しとは、そも何んの意ぞと。然り、知らざるも尤もなり。今日の諸學校に於ては、論語を教へざるなり、武士の神魂を説かざ

るなり、其知らざるも亦た宜べならずや。抑々今日に於ける文部省の方針なるものは、多藝多能の物識りと職工的人間を作るに在るのみ、何れの處にか精神教育を鼓吹するものやある、修身科も亦た記誦詞章の學となりしにあらすや。往時の學問は活きたる人物を作るに在りき、而も今日の學問は死したる機械を作るに在り。吾人は一教會若くは一雜誌に於て、精神教育を鼓吹するも、已に幾千幾萬の學校に於て、此等を等閑視し去るのみならず、偶々之を主張するものあらば、是れ古風の教育、當世に用なしとて斥くるに至る。吾人に不屈の精神なきにあらず、然れども孤手の以て狂瀾を支ゆる能はざるを見るなり。更に吾人は、今日に至るまで、新聞の必要を認め居たりき、即ち今は古と事替り、婦女少年と雖ども、少し位は海外の形勢をも知らざるべからず、内國の出來事にも通せざるべからず、於此乎新聞の必要起る。然れども今日は如何にや、諸君は今日の新聞

聞を如何と見る、道德と智識に必要なものは極めて尠く、全面殆んど情死と盗賊と藝妓の紹介と、醜汚の記事にて満たさる、管に醜汚の記事にて満たさるゝのみならず、暗に人の悪念と汚情と、道ならぬ慾望とを、挑發するものたらすんばあらず。ア、日本全國幾百萬の青年男女は、日々此等の諸新聞紙より墮落の誘惑を受けつゝあるなり、而して吾人此等に逆ふて戦ふ「道」の如きものは、畢に何んの効力をも見ること能はざらんとす。語を寄す。新聞記者諸君！諸君は辛き浮世を渡り兼ね、今や終に墮落せり。諸君の墮落は尙忍ぶべきも、我善男善女を誤らしむる罪悪や終に忍ぶべからざるなり。之を要するに前述の如くにして、吾人の周圍はみるゝ四大賊徒の爲めに征服せられ、吾人の微力また之を奈何ともすること能はざらんとす、痛嘆何んぞ堪ゆべけんや。其れ然り然れども吾人神を信じ、又た遂に眞理の勝利たるを信するものは、たとへ敵の爲めに敗

れて十字架上に釘殺せらるることあるとも、亦た厭ふどころにあらず。只だ吾人をして今日吾人の敵の何物たるかを記憶して戦はしめよ、曰く不都合なる大臣、曰く不埒なる御用商人、曰く俗殺せられたる文部省、曰く墮落せる新聞記者是れなり。

此稿を草し了りて後、廣島高等師範學校生徒に告げたる文相の訓示なるものを見る。其意に曰く學生の氣風を改善すべし、曰く教師たるものは躬行實踐を以て生徒を率ひざるべからず、曰く教育勅語戊申詔書こそ奉體せざるべからず云々。然れども想を沈めて稽へ來れば、此等の訓示は畢竟唱る銅や響く鉄の如きのみ、人を得て徳育を司らしむる設備に出でず、尙ほ單だ文字と言説にのみ依らんす。吾人は依然文部省の曉らざるを悲しむ。

修徳の苦心

孔子は、『徳の修らず、學の講せず、義を聞て徒る能はず、不善改むる能はず、是れ吾が憂なり』と言はれた。一方より見れば、餘りに謙遜過ぎて、厭味のある様に思はるゝが、此事に就き余輩近頃大に發明するところがある。過日來村井兄と約束して、互に演説の癖を批評し、且つ之を改めんと試みた。ところが却々の困難を感じる。悪い癖のあるのは分て居る。然し實際に臨むと、復た之を繰返し、

復た之を繰返し、ごふしても直らない。ソコデ大に悟つた、唯り演説のみの癖ばかりでない、己れが性質の悪いところ、己れが人格の卑いところも亦た同じ事で、却々俄かに改まるものではない。徳の修らず、不善の改まらざる、是れ吾が憂なりとは善く謂はれたものだ。『山中の賊を討する易く心中の賊を討する難し』と王陽明の謂はれたのを引て、人にも勧め、自己をも戒しむることであるが、然し王陽明が自ら感じたほど感ずる人が幾人あらふ。誠に今更の如く省みて悚然たる次第である、こんな修養談は、毎日の様に言ふて居るのである、然し近頃演説の一事より、更に大に啓發するところあり、修養上一段の警戒を加へたことを白状するのである。そこで又た一ツ思ふことあり、余輩は村井兄に云はるゝまで、余輩自身の癖を知らなかつたのである。否、自己は知らなかつたが、人には夙くより知られて居たのである。今更人の不親切を怨むではな

いが、人は却々遠慮して、此方の癖を云ふて呉れるものでない。因
て互に約束して、相互の欠點、相互の習癖を言ひ合はすことが、極
めて必要であることを深く感ずる。我れ若し人をのみ教へて、人よ
り教へらるゝことを怠りて居るならば、己れは一廉修養を勉めて、
其人格を上げたつもりでも、人の眼より見るなら、ア、彼れはまだ
／＼あの癖が擱れぬ、あの不徳のところ直らぬと、惜しまれたり、
笑はれたりして居るかも知れぬ。斯くて願みて周囲を見るときには、
成程自問自欺の人が無いでもない様である。其惡癖と不徳のところ
を知りてすら、却々容易に改め難いものであるに、況してや、更に之
を知らざるに於ては、永却之を改むることが出来ないであらふ。曾子
の三省と、孔子の苦心とは、今更ながら、痛切の訓戒であることを
自覺する。演説の批評を聴いて、人格の修養に一大啓發を得たると同
時に、己れの欠點を忠告して呉るゝ友人を持たざる人の不幸を曉る。

煩悶驅逐法

我等の間に煩悶者ある筈なし、即ち眞に神に事へ、徳を修め、隣
を愛し、永生を信するものには、煩悶のある筈なし。然れども信仰
足らず、修養深からざる弱き兄弟には、猶ほ煩悶に囚へらるゝこと
なしとせず。請ふ少しく辯ずるところあらん哉。
先づ煩悶と苦痛とを區別せよ。煩悶とは兎や角と思ひ煩ふ事、英
語のツラーヴル、論語に所謂「小人は長へに戚々たり」とあるのも即

ち是れなり、而して苦痛とは單に『いたみ』を感ずることなり。聖人豪傑と雖ども、苦痛は毎にあるものぞかし、察々の身を以て汝々の世に處し、憂國の情を擁して、邪見嫉視の間に動く、豈多少の苦痛を感せざらんや、而も彼等には煩悶なし、『智者は惑はず、仁者は憂へず、君胡んぞ戚々眉双愁ふ』と、王陽明の咏じたるところ、喝破し得て妙なりと謂はざるべからず、左らば之れより少しく煩悶驅逐法の心得に就て語らしめよ。

先づ覺悟を定めよ

煩悶は覺悟の足らざるより起る。何事にもあれ覺悟を定め、度胸を据ゆれば、案ずるよりも、産む方が安きものなり。徳川家康は曰く、人は重荷を負ふて遠き路を行くが如しと、此覺悟あればこそ、辛抱に辛抱を重ね、苦勞に苦勞を積み、悍然として萬難を排し、悠

然として百事に處し、遂に回天の大業を成就するに至りたるなれ。基督は曰く、十字架を執て吾れに従はざるものは吾が心に協はざるものなりと。十字架とは何んぞ、討死の覺悟なり、人誰か生を好んで死を憎まざるものあらんや。而かも義の爲め道の爲めに進まんと欲するときには、鼎鏝甘きこと猶ほ飴の如きものあり、其間何んの煩悶あらんや。予は嘗て心象會の席上に於て、數多の大針を其双腕に貫きて平然たるものを見たり、慘たる光景や人をして膚に粟を生せしめぬ。然れども其の慘たる光景とは、未だ覺悟を定めざるもの心に映ずるもののみ、一度び覺悟を定めて公衆の前に出でたる本人にとりては、何んの苦痛をも感せざるものなり。精神の發動や實に偉大なるものありと謂はざるべからず。抑々諸君は此人世を什麼と觀る。山の險あり、川の阻あり人心反覆の行路難あり。而して、老病死苦の一生を通じて、終に一棺の土と化するに至るまで。ゲ

テの所謂る人生を曳きすり行くものにあらざるはなし。是れ此世なり、是れ人生なり。怒て之を嘗るも、風波爲めに退かず、泣て之に訴るも、寒暑爲めに其度を變せず、山に入て之を避けんか、荆棘尙我足を傷る、谷に隠れて之を通れんか、溪流尙ほ我瓶を漂はず、所詮はこゝに覺悟を定めて、猛然之れと闘ふに在るのみ、歐米人の所謂「自然を征服する」の一語は、實に吾人の方針たるべし。東洋は久しく厭世教に毒せらる、是れ我東洋人に煩悶者の多きゆえんとす。奮へ進め、山狼我れに尾す、停る勿れ、坐する勿れ、倒る、勿れ、只だ直行せよ、直行止まずんば、彼敢て我を害せず、終に我れを安宅に送りて去らん。悲む勿れ、泣く勿れ、此蜂益々我を襲はん、落る勿れ、沈む勿れ、水力逾々我れを壓せん。只だそれ日光に向ふて走れ、黑影は常に我背にあらん。只だそれ敵陣を望んで進め、彈丸は却て我頭上を通過せん。若夫れ笑ふて風雨の中に立つことを得ば、

風雨も亦た我れをして快哉を呼ばしむる材料たらんのみ。是れ大丈夫、世に處するの覺悟なり、豈徒らに啾々たらんや。莊子の所謂る貧すれども慙せずの一言は是れ大丈夫の神魂にあらずや。其れ然り、然れども煩悶者諸君にして尙ほも斯言に奮起する能はず、影を逐ふて走り、丸を怖れて戦き、到底猛然たる覺悟を定むる能はずとせば、吾人は知る矣 諸君の前には唯だ、自棄あるのみ、自滅あるのみ。

天我を玉にする也

孟子曰く、天の斯人に大任を授けんとするや、先づ其心思を苦しめ、其筋骨を勞せしむと。左らば歴史に徴し、人物傳に看よ。秀吉と云ひ、家康と云ひ、ピーターと云ひ、アルフレッドと云ひ、近くは我國維新の諸傑と云ひ、若くは今日富豪家と云ひ、孰れか皆心思

を苦しめ筋骨を勞したるものにあらざるべき。凡そ苦勞せぬものは、
 語るに足らぬものはあらず、義理に疎く、人情に通せず、只だ
 理窟を是れ知るのみ。其得意の時には天空に雄飛する概あるも、若
 夫れ失意の時にいで會へば、悄然乎たる其の形や、紙鳶の雨に打た
 れたるが如く、復た見る影もあらざらんとす。彼れ風に傲るの老松
 に觀よ、此れ濤に撃たる、巨巖に看よ、如何に豪壯雄偉なるぞや。
 人間も亦た此くの如し、幾多の艱難と闘ひ、幾年月の勞苦に耐へ、
 而して能く不退不屈の精神を持續し來るものは、是れ實に人界の偉
 觀なり。今の青年は不幸なり、世已に治りて、復た其心膽を練るの
 機會を有せず。今の青年はつまらぬ事に煩悶す、是れ大事に與から
 ざるが爲めのみ。大聲起らば小聲滅し、大痛來りて小痛止む。男子
 已に國家の爲めに起つ、豈また一身の衣食を是れ憂へんや。平水は
 腐り、腐水には子子生ず、諸君に子子の煩悶あるは、大志こゝに立

たざるが爲めのみ。今や我日本は宇内の中央に乗り出でたり、波濤
 は益々高く、動搖逾々烈しく、乾坤將に暴風雨を捲かんとす、此の
 時に當りて婦女子同様の煩悶を爲す、豈日本男子の爲めに耻づること
 ころなしとせんや。然らば好んで困難を歓迎すべし、而して今より
 大事に當りて屈せざるの演習を爲すべし。其香しきことは、碎けた
 る溪流の水の如く、其崇きことは巍々乎として聳ゆる巨嶽の如く、
 其戯るゝや赤子の如く、其怒るや獅子の如く、聖か、豪か、野か、
 従か、溥博淵泉時に之を出して、而して四時に通ずるものは、心思
 を苦しめ筋骨を勞したるものにあらずんば能はず。何んぞ喜んで天
 の我を玉成せしめんと欲し給ふ其の恩寵に感謝せざるや。且つや煩
 悶は我れに在りて物にあらず。ピードロは指頭に壞はれ、うごの大
 木は軟風に倒る。我父嘗て予が「仕方がない」と云へるを執へて叱して
 曰く「男子此世に處す、決して「仕方がない」と云へる如き弱音を吐く

べきものにあらず、人生は到るところに仕方のあるものなり、然而して若夫れ逾々仕方無いと云へる時に到着せば、潔く割腹して死すべきのみ、而して猶ほ仕方なしと謂ふを得ず。往時の教育や概ね此くの如し。然るに今や妄に煩悶者に同情を表し、御境遇御尤もなりと嘆し慰め、奮起すべき青年をしてピドドロのお姫様たらしめんとす。慷以て慨すべきにあらずや。

惑ふ勿れ

且又た人生は憂苦のみにあらず、天地には花月あり、家庭には父母あり、而して神に事へ、徳を修め、隣を愛し、永生を信じて、此世を渡る、豈何をか煩悶せんや。一度煩悶病に襲はれたるものは、暗黒の方面をのみ是れ観じて、光明の方面に向はず。春には花を見ずして、夏の炎天の近づけるを憂へ、秋には紅葉を眺めずして、間

もなく寒天に入るべしと啣つ。若夫れ此くの如くんば、何れの時にか愁眉を開かん。醒めよ速かに汝の惑より醒めよ。穴に居て大に呼べば、聲は數仞に鬱り、風に順て長く呼べば、響百里に通ず、音聲に大小あるに非ず、其境遇異なればなり。買臣は飢を忍んで行歌し、班超は筆を執て慷慨す、然而して其時を得ざるに當てや、容色黧黒、神情沮怩、言は瓦礫となり、行は狂狷となるも、其の一度錦を佩びて故郷に歸り、旌を崑崙の外に懸くるに及べば、容彩光煥、神氣開發、其言や金玉となり、其行や世助となる、人格に異同を來したるにあらず、時に通窮あるを以てなり。矢驚けば白雪の嶺を踰へ、水激すれば重石を轉ず。人間も亦た此くの如し、如何に軟意弱志の人なるとも、一度奮激して蹶起せば、豈禍を變じて福と爲すこと能はざらんや。颯風朝を終へずとは老子の金言、暫らく石壁に侍せよとはソクラテスの名語。いつまでも風の吹くものにあらず、いつまで

も雨の降るものにあらず。石壁に侍するときこそ即ち希望に燃ゆる
大快樂の時たれ。高崎は回みて和せんとし、西郷は劍を抜て之を逐
ふ、一は死を怖れて慄み、一は死を決して進まんとす、而して快樂
は寧ろ西郷に在り。嗟呼此處の消息を解くものにして、始めて天下
の快樂を語るべし。彼れヒステリーの腐女子と伍を爲すもの、何ん
ぞ大丈夫の快樂を知らんや。唾して以て棄すべきなり。

乞食ごなれ

彼れは食へぬ、此れは飲めぬと言ふて居る間こそ、煩悶に襲はる
、時代なれ、ツント決心して其身を落して見よ、煩悶などは何處を
探しても無くなるべし。之を聞く、乞食にても、己に其齒が白くな
るまでに至らば、最早や太ものにて、如何なるものを食ひ、如何
なる物を飲むも、決して其身を害することなく乾坤無碍の身となる

と云ふ。古人曰く窮すれば通すと、寔に此事を謂へるなり。諸君何
をか煩悶す、思ひ切て乞食ごならば、乞食の間にも亦た樂地あるに
あらずや。疾病に苦しむものは何人ぞ、婢僕にあらず、下民にあ
らず、多くは是れ紳士淑女の類にあらずや。食氣を失ひ、血色を損じ、
晝は妄想に襲はれ夜は不眠に苦しむ、是れ皆上流社會の特有物にし
て、下民乞食の知らざるところなり。嗟呼諸君何をか煩悶す、其煩
悶は未だ虚榮を脱却せざる罪に歸す、未だ飲食を取捨する境遇に在
るが爲めのみ。畢竟するところ我儘より起る、吾人豈諸君に同情せ
んや、寧ろ憫笑せらるべき人なりとや謂はん。
嗚呼、説き去り説き來りて顧みれば、吾人には最早や煩悶なしご
雖ども、而かも猶未だ決心の足らざるものあり。吾人今や道を提げ
て曠野に呼號し、將に一大宗教の先驅者たらんとす、然れども願み
れば未だ苦勞の足らざるものあり。ポーロには海の難、山の難、同

族の難ありき、日蓮、ルーテル皆然り、而して吾人には一も之れなし、是れ吾人が無力なる爲めか、將た天が吾人を祝し給はざる爲めか、其は兎も角も吾人は今や世の所謂煩悶者が憂ふる所の艱難を歓迎し、彼等が避けんとするところの困苦を渴望し、逆境悲境の交るゝ我れを襲はんことを祈りて止まざるものなり。蓋し吾人の如き鈍物には、大刺戟物の必要を感じればなり。煩悶者諸君、吾人の覺悟や此くの如し。諸君の憂ふるところは、即ち吾人の喜ぶところなりと知らずや。

人心之靈。主於氣。氣體之充也。凡爲事。以氣爲先導。則舉體無失措。技能巧藝。亦如是。靈光無障礙。則氣乃流動不礙。四體覺輕。英氣。是天地精英之氣。聖人蘊之於內。不肯露諸外。賢者則時々露之。自餘豪傑之士全然露之。若夫絕無此氣者。爲鄙夫小人。碌々不足算者爾。(佐藤一齋)

秋郊散策

一日、眸を窓外に放てば、秋高く氣清く、蒼天上に飛び、萩籬邊に颯々。於此乎、感興勃々禁ずる能はず、乃ち杖を曳て郊外に出で、俯仰之を久うすれば、胸次爽快、俗情散滅、直にデヴィニチーの人となる。

アミエル曰く吾は心靈物に生れたるを謝すと、然り予も亦た彼れと其の感を同ふす。顧みれば人は皆心靈物に生れたるもの、豈唯だ

アミエルと予のみならんや、而かも世上此の感謝あるもの幾人ぞ。
 天は空間のみ、氣は酸炭水の集合のみ、鳶は腐鼠を求むる俗鳥のみ、
 而て萩は無情の草花のみ、是れ死學者若くは凡眼の見るところ、然
 れども吾人靈眼を開て之に對すれば、高大の氣、清快の情、彼我が
 間より塗湧し來る。誰か俗酒に酔ふて陶然たりと謂ふ、スピノザは
 斯靈界の氣に酔ひぬ。誰か粉女を指して美なりと謂ふ、バイロンは野
 花の一莖に換へ難しと曰へり。誰か人類を稱して皆盡く心靈物なり
 と謂ふ、滔々たる世上多くは是れ屬肉の人にあらずや。花に吟じ月
 に嘯き、詩を賦し、歌を咏じ、自ら號して雅客と曰ふ、而かも其心
 や名に在り、利に在り、之を以て權勢に媚び、時流に阿り、畢に花
 月をして雲泥の間に悲憤せしむ。吾人は詩を賦せず、歌を咏せず、
 而かも月我れに笑み、花我れに語り、無限の靈通、彼我の間に脈々
 たり。西行は鳴立つ澤に哀れを催し、永叔は秋聲の辭に嘆息を洩し、

孰れも心靈の人たるを示す、而かも我黨より之を觀れば、彼等の永
 生を距るや猶ほ遠し。若夫れ吾人の靈を將て、直に天地萬有の生命
 に接し、更に其生命の大靈に合せんか、生ありて死なく、實在あり
 て假相なく、此世に在るも、此世を去るも、永久に天父と與に侶た
 らんのみ、亦た焉ぞ世を果敢なみてか、秋風を恨まん。
 斯く感じ斯く想ひつゝ、西天を望めば、夕陽富嶽に接吻し、晚鴉暗
 林に入る、正に是れ吾人と世上の景、感慨盡くるところあらざりき。

人格の試験

福澤翁が、「何んでも人間はづる〇〇立舞はらなければ馬鹿を見るぞ」と、同志社卒業生たる我知人に云はれたことがある。若しも之を眞に受けて、眞に左様心得て居るものあらば、其れこそ馬鹿を見るに極つて居る。先づ福澤翁の人格より考へ見るべし、福澤翁は決してづる〇〇人ではなかつた。至極律義な、親切な、利己よりも寧ろ邦家を慮つた人である。其づる〇〇の意味は馬鹿正直では不可ぬこの訓示

である。予は屢々勝海舟先生より種々の教訓を受けたものであるが、先生は口辭の様に「乃公は人が悪いよ」と言はれた。其意味は本當に悪物と云ふではなく、却々人に煽揚られたり欺瞞されたりする馬鹿者ではないから、何んでも敵本主義でなく正直に持つて來いこの訓示であつた。勝先生の教を受けて悪物となりたり、福澤翁の言を聴て眞にづる〇〇なつた人間あらば、兩雄は之を聞て地下で泣て居るであらふ。

青年諸君眼を擧げて周圍を見るべし。つまり悪物やづるい人間は成功するものでない、一國も其通りで、スペインやホルトガルの如き悪業を働きたる國家は衰滅するに極つて居る、正直と勤勉と忍耐と勇氣は英國が確に大を爲したる資本である、酒匂氏が其子孫に遺したる血淚的の教訓は、今日の青年の急處を刺したものである。聖書には壽くものは又た其刈るところとなるべしとある、論語には「人

信なくんば立たず」とある皆同じ事で、諸方より先生ごふか良き口の御紹介を願ひますと来たところで、平生懈怠者であつたり、無責任者であつたり、づるい人間であるときには、之を懇意の人に周旋することが出來ぬ、日々人に交際する諸君の行動は、諸君の價値を定めつゝあるものである。ソラ試験ちや落第せまいぞと、一生懸命に勉強して居るが、諸君の人格の試験は如何で御座る。諸君は日々人々より其人格を試験せられつゝあるのである。學問の試験の及落を氣遣いながら、一向人格試験の及落に心着かすとは如何に本末を誤りたる處置ぞや。人格に落第せば、到底世に用ゐらるゝものではない。尤も金錢のみを以て成功を律せば、盜賊の張本も亦た成功者に相違ない、今日の日本でも随分泥的若くは幫間的成上り紳士が世に時めいて居る様である。然し彼等は積多的富豪家で諸君の名譽心を起さずるものではあるまい。今や彼等は金錢を擁して世の崇仰を買

はんと欲す、而かも識者は笑ふて相手にせぬ、よしや外面に尊敬の意を表するものも、其實腹の中で爪弾をして居る。殊に今日は革命時期を過ぎて治世に入れり、腐敗其極に達して眞面目に歸らんとす。今後の大成功者は、必ず人格の如何に由るものと覺悟せねばならぬ。人格の試験問題、是れ第一に來るべき緊急問題である。

詔勅

新詔勅出づ。要は忠實業に眼し、勤儉産を治め、惟れ信惟れ義、

醇厚俗を成し、華を去り、實に就くに在り。誠に刻下の金誠なり。惟ふに此の詔勅たる、ひとり國民一般に下し置かれたるのみならず、内閣の上に立ち、元老の班に列する人々の上にも降れるものなり。庶幾くは、此際相場に手を出したり、御用商人と金儲を約したり、濫行を社會に示しなごして、醇厚の俗を敗る如き方々も、大に省みて詔勅に忠ならん事を努められたきものなり。

新年の覺悟

耶穌は傳道に當りて、二回の大覺悟を爲せり。一は利己的精神を

擲つ事。二は道の爲めに死する事是れなり。

第一の大覺悟は、彼の誘惑の記事によりて明かなり。

イエス聖靈に導かれ悪魔に試られん爲めに野に往けり、四十日四十夜食ふ事をせず後餓えたり、試むる者かれに來りて曰けるは、爾もし神の子ならば命じて此石をパンと爲よ、イエス答けるは人はパンのみにて生るものに非ず、唯神の口より出る凡の言に因るを録されたり。是に於て悪魔かれを聖京に携へゆき、殿の頂上に立てて曰けるは、爾もし神の子ならば己の身を下へ投よ、蓋は汝が爲に神の使等に命ぜん、彼等手にて支へ爾が足の石に觸ざるやうすべしと録されたり、イエス彼に曰けるは主たる爾の神を試むべからずと亦録せり。悪魔また彼を最高き山に携へゆき、世界の諸國くその榮華を見せ、爾もし俯伏して我を拜せば、此等を悉くなんぢに與ふべしと曰ふ。イエス彼に曰けるはサタンよ退け、主たる爾の神を拜し惟之れにのみ事ふべしと録されたり。終に悪魔かれを離れ天使たち來り事ふ(馬太傳四ノ一―十)。耶穌は第一に饑餓の誘惑に打勝てり、耶穌は福音を宣傳せんとして起てり。然れども何處よりパンを得べきか、是れ大問題なり。然れども耶穌は曾て其等を念頭に置かざりき。已にして耶穌は果して饑餓に迫りたり。於此乎惡魔來りてパンを得べき道を耶穌に教へぬ。今や耶穌は餓死せんとするなり。然れども大眼を開て叱して曰く人はパンのみにて生くるに非ず、唯だ神の言に因るのみと、耶穌は、神

の言を守りて餓死するども、尙ほ悪魔の言には従はざりしなり。新年に於ける吾人の覺悟も、亦た此覺悟を繰り返すに外ならざる也。耶蘇は第二に高慢の誘惑に打勝てり。傳道に従事するもの、最大誘惑は高慢に陥ることなり。已に餓死の覺悟なりと吹聴す。即ち其間餓死を以て誇るの嫌ひなきを得ず、而して是れ已に、悪魔に誘はれつゝあるものなり。我れは名利を擲ちたり、何事も神の命をのみ奉せんと決心せりなご、云ふ、而かも其言已に高慢の臭氣を帯ぶるなり。然而して彼れ世人に向て罪人と呼び、悔改せよと命じ、己れは如何にも神の子たるの資格を有するかの如く説教する傳道者の如きは、已に大々的高慢の誘惑に陥りつゝあるものとす。耶蘇は此誘惑に勝てり。吾人も亦た此際大猛省を爲して、此の高慢の誘惑に打勝たざるべからず。

第三に耶蘇は此の世の榮華の誘惑に勝てり。吾人死を決して出で

來る、豈復た榮華を夢みんや。然れども事若し成功せば、或は此誘惑に襲はるゝことあるや亦た未だ知るべからず。彼れ維新の誠士が、業成り名遂げて後、今日の醜態を演ずるを見ても、亦た以て鑑とすべし。此第三者は將來に屬す、而かも希望と抱負の大なれば大なるほご、此誘惑の監視を要す。

嗚呼耶蘇は傳道の開始に當りて、右の三個の誘惑に打勝ちぬ。吾人爰に新福音を宣傳せんと欲するものも、劈頭先づ此三者と戦ふて打勝たざる可らず、一言にて之を言はば、全く利己的精神を擲たざるべからず。

第二に於ける耶蘇の大覺悟は、死を決してエルサレムに上りたる時に在り。耶蘇の慈眼は直に當時の社會問題に入れり。一方には紫の衣を着て驕り高ぶるものを見ると同時に、一方には其門前に病み倒れて、今や瀕死の状態に在るも、尙ほ之を哀れみ救ふものなく、

却て瘦狗の來りて其腫物を舐るを眺め來るや、(路九十六) 憤慨の情禁ずる能はず、於此乎富めるもの、天國に入るは難い哉と叫び、貧者に福音を聽かせらるる説き、今笑ふもの禍なり、今悲しむもの福なりと警告し、終に噫汝等此の最微小者に爲せしは即ち予に爲せしなりと斷じ、此等無告の民の爲めには、其身を殺すも亦た辞するところにあらずと覺悟を定め給ひしなり。

次に耶蘇の熱血は當時の宗教界に對して沸けり。ラビも、祭司も、パリサイ人も、學者も、皆此可憐の民を見棄て去り、唯り異教徒のサマリタンが、之れが爲めに起つを見るや、更に憤慨の念に堪へざりき。加之彼れ當時の宗教家なるものが、經典註釋の專賣權を壟斷して、ほしひまゝに斯民を苦しめ祭事を好みて恤賑を好まず、恰も白く塗りたる墓の如く、外面は美はしく見るも、内には骸骨と諸々の汚穢にて満てるを見るや、噫汝等禍哉、替者なる導者よと叫ば

ざるを得ざるに至りぬ、(馬太二十章)。

耶蘇は右の二大憤慨に捕はれたり、而して此憤慨を率て、斯民を救はんと決心せり。於此乎其故郷より始め、ガリラヤ附近に傳道し、已に十分の成功を遂げしも、眞に其目的を貫徹せんには、是非ともエルサレムに上りて、此敵の根據を衝き、此敵の頭腦を碎かざるべからずなりぬ。其れ然り然れどもエルサレムに上らば、果して如何なる運命に出會ふべきか、耶蘇自ら惟へらく、或は殺さるゝに至るべし、否、或は當時の最大酷刑たる十字架に釘らるゝに至るべし。然れども『吾れ若し地より擧げられなば萬民を引て我れに就らせん』(約翰十二ノ三二) とあるが如く、更に願みるに、十字架に釘らるゝことは失敗にあらず、吾れ十字架に釘かば、始めて我福音の大々的傳播を見るべしとは、是耶蘇がエルサレムに上らんとするときの胸中なりき。左ればペテロは耶蘇がエルサレムに上りて殺さるゝこと

あるべしと告げ給ふや、直ちに耶蘇を援き留めて、『主よ宜しからず、此事なんぢに来るまじ』と曰ひしに、耶蘇は毗を決してペテロを反顧み、『サタンよ退け、爾は我に礙くものなり、汝は神の事を思はず、人の事を思ふ』と誡しめられぬ(馬太十六ノ二三)。耶蘇の覺悟のありしところや知るべきなり。左ればエルサレムに上るや、耶蘇は果して先づ宮殿に入り、繩を以て鞭を造り、殿にて牛羊鴿を賣る者と發銀する者、及び其牛羊を逐出し、發銀するもの、金を散らし、其案を倒し、鴿を賣るものに曰けるは、此物を取りて往け、我父の家を貿易の家となす勿れ』(約翰二ノ十四—十六)。其舉動の劇烈なる、恰も猛虎の荒るゝが如き觀なくんばあらず。於此乎パリサイも、サドカイも、レビも、學者も、皆一團となりて、此進撃者に向ひ、こゝに一大決戦となり、其間ニコデモの如き降服者を出せしも、其身は終に捕虜となり、豫斯の如く、いよゝゝ十字架上に釘せらるゝに至

りしなり。想ふに福音書にある『十字架を任て我れに従はざるものは我に協はざるものなり』との言と云ひ、『凡そ我れに來りて、其父母、妻子、兄弟、姉妹、又た己れの生命をも憎むものにあらずんば、我弟子となることを得ず』(路加十四ノ三四)との語と云ひ、『我れは刃を出さんが爲めに來れり云々』と云ひ(馬太十ノ三四)、『我れは火を地に投げ入れん爲めに來れり。我れ何をか望む、已に此火の燃へたらん事なり。我れに受くべきバプテスマあり、其成遂げらるゝまでは、我が苦痛いかにばかりぞ』(路加十二ノ四九)、とあるが如きは、確かにエルサレムに上らんとするどきの大覺悟を言ひ顯はしたるものに外ならざるなり。然則諸君よ、吾人新年に當りて、復た何をか言はんや。已に基督の心を以て心と爲すもの、其覺悟の在るどころや知るべきなり。即ち第一一切の誘惑に打勝て以て利己的精神を擲つに在り。第二、一方に社會問題を提げ、一方に宗教的革命を唱へ、潔く我身を十字架

天地人
上に供するに在るのみ。吉田松陰嘗て佐久間象山に書を寄せて曰く、「我れ既に天下の爲めに死を決す、遺る問題は、如何にして何れの時に死すべきかに在り」と。吾人今日の覺悟も、亦た之れに外ならず。以て新年の辞と爲す。

偶感一滴

讀むべきもの

文章を學ぶ爲めにも、修徳の心得の爲めにも、大學、中庸、論語、

孟子を讀むべし。最初は無茶苦茶に素讀のみにて、凡そ三四十回も讀むべし、其語句を暗誦するまで讀むべし、朝夕間ある毎に讀むべし。然而して素讀已に自由たるに至らば、少しく其意味を考へつゝ、讀み、遂に玩味し得るまで讀むべし。凡そ名文家たらんと欲するものと、修徳に志あるものは、今日此四書を讀むを最上とす。

讀むべからざるもの

讀むべからざるものは、今日流行の小説なり。人格を養ふには害ありて益なく、文章を學ぶには、浮薄淫靡にして、豪宕の氣なく、睨天の慨なく、只だ泛々たる青年男女の寫生を目的と爲すが故に、浮世三文の文士たらしむるのみ、近くべからず。

青年の好む讀物

天地人

近來の青年は、好んで懐樂的の雑誌を讀み、小冊子の傳記を喜び、短片の人物評若くは物語を聽かんことを求む。是れ青年の氣風が輕浮に馳せつゝある兆證なり。何んぞ懐樂的と云はんや、何んぞ小冊子と云はんや。何んぞ短片と云はんや。青年時代の日月は金玉の如し、努めおろそかに過すべからず、懐樂を得んと欲せば、山河風月の間に其神を遊ばすべし、傳記を見んと欲せば、歴史より緝くべし、人物評論を聞かんと欲せば、堂々たる天下第一流の書を探ぐるべし。懐樂的と嘯り學問とは目下日本青年界に流行する大患也。

讀書家の着眼

讀書に死んだ讀方と活きた讀方あり。活きた讀方とは傳記を讀むにも歴史を讀むにも修養書を讀むにも讀みつゝある間に、如何にせば之を今日の我身に應用すべきかと稽ふること是れなり。死んだ讀

方とは、ただ面白半分に讀むか、事實を記憶する爲めに讀むか、文字の講釋にのみ意を用ひて讀む如き此れなり。面白半分に讀むものは輕浮の人となり、事實を記憶する爲めに讀むものは博學を銜ふ小はとなり、講釋のみに意を用ゆる人は、文字三昧の死學者となる。

堂々たる人物

一青年あり尋ねて曰く、堂々したる畏るべき人格は、如何にして養成せらるべきや。能く辯ずる人あり、然れども輕きところあり、能く文を作る、然れども貫目なきなり、人呼んで學者と稱す。然れども物識り機械の如き觀あり、かの堂々として畏るべき人格は何れより生じ來るや。予答て曰く、是れ別種の修養を積まざるべからず。一言にて云は、主義の人となるに在り、何時でも道の爲めに死すべき覺悟の人となるに在り、即ち意志の修養に在り。

意志の修養

然則意志の修養を問ふ。曰く聖書にある耶蘇と悪魔との問答を見るべし馬太傳四章。第一耶蘇は餓死することも正義を守ると決心せり。第二耶蘇は名譽心の爲めに動かされじと決心せり。第三耶蘇は悪魔に俯伏して世界の榮華を得るよりは、寧ろ裸体にて十字架に釘くべしと決心せり。彼の學者の如くならず、權威を持てるもの、如く教へ給へりとあるは、即ち此意志力より來るものと知るべし。

人物の鑑定

然りと雖も誤らるゝ勿れ、外貌には堂々たる人物と見へて其實看板倒あり。外貌輕浮に見へて、心膽鏡の如き人あり。熱血家にして臆病者あり、君子の如く見へて虚榮家あり、一見にて速断し難し。

只だ其裏面に於ける平生の行動に注意せよ、人畢に度くす能はず。

神の存在

一青年曰く予れ神の存在を聞けども未だ之を認むる能はず。答へて曰く從來は神を理性に求む、理性に求む可ならず、然れども試みに之を美性に求め來れ。山時水流、柳綠花紅。君之れを眺め去り眺め來りて、胸裡如何なる感興をや起す。想ふに一種の美感に打たるべし。此美感是れ何物ぞ、論理の以て証明すべきなし、而かも一種の靈覺に觸るゝあるや事實なり。神を認む亦た此に於てせよ。暫く理性を離れて、我が所謂宇内と人生とに横溢する眞善美愛のデヴィニチーに觸るべし。之を知るものは之を好むものに如かず、之を好むものは之を樂しむものに如かず。彼れ神を知識の上にも

求むるものは、畢に宗教の極意を味ふ能はず。彼れ美術、音楽、詩歌の如きは最も宗教に近きもの、而して神學の理論の如きは、最も宗教に遠きもの、近きを捨て、遠きに求む、是れ君の神を認むる能はざるゆえんなりと。

悟道の極意

悟道の極意も亦た理窟にて得らるべきものにあらず。鶯飛戻天魚躍于淵と云ふも、講釋のみにては駄目なり、極意を教へらるゝも駄目なり、要は屢々傳習して自得するに在り。是故に悟道の極意は、畢竟するところ、文章に依るよりも詩歌に依るを可とす。王陽明の簡易の工夫も、傳習録に依るよりは、啾々吟より得るところ多かるべし。問はれても言はれぬ梅の匂かなの一句中に、無限の悟道を含むものとす。彼れ口舌の理窟に泥するものは、與に宗教の極意即ち

悟道を語るに足らず。

種々の主義

主義に立つと云へば、利害に拘はらず、盛衰に關せず、己れが善且つ義とする主張に向ふて猛進するに在りと思ひしに、近來は然らず、色々の主義者顯はれぬ。曰く我は自然主義なり、道徳など云へるものは偽善のみと、而して犬猫主義を以て誇るあり、曰く我は利害主義なり、己れに利あらば之れに就き、己れに害あらば之れを去る、是れ赤裸々の眞理なり、此れまで良心などに束縛せられ居たるは殘念なりとて悔改するものあり。曰く我は勤儉主義なり。今日まで客に茶を出し、菓子を呈し、食饌を供したる如きは不心得の太甚しきものなりき、自今は斷じて之を廢すべしと。於此乎、人彼を諫めて曰く其れは餘りに極端なり、左るときは、從來の友人等は、

畢に君の家より遠ざかるに至るべしと。曰く友人の來らざるは福也、來れば必ず我が金儲時間を妨ぐべし、是れ儉を行ひ、更に勤を得る道なりと。

得意の人

人物の眞價は得意の時に最も顯はる。失意の時に其氣を挫かざるものなきにあらず、而かも得意の時に襤褸を出さるもの殆んど罕れなり。其當世に用ゐられ來るや、昂々揚々、四面を睥睨しつゝ、容態を繕ひ、遽かに舊友に對して言辞を改む。更に言容に異狀を來さずとも、常に得意顔に多忙を語り、舊友を客間に待たせ、厚意の信書に報せず、會すれば更に多忙を語る。ア、多忙々々、果して何事の多忙ぞ。義と禮とを欠て尙且つ多忙を語るもの、彼れ俗人に謠歌せらるゝも、具眼者に爪弾せらる。得意の人の幸不幸未だ俄かに判

すべからざるなり。

吾れは吾れたり

『吾れは吾れたり』といへる此精神が眞に我物となるに於ては、天下の快事蓋し此上あるべからず。我れを悪解するもの、誹譏するもの、牛と云ひ馬と云ふもの、一切我心を乱す能はず。天下基督教徒を誣て國賊と稱せしとき、吾れは其國賊の徒となりて平然たり。基督教徒皆齊しく禁煙禁酒を主張せしとき、吾れは獨り嘯て超然たり。人皆我を呼んで暖昧派と爲す、吾れ持するところありて莞爾たり。大丈夫の天下に處する、須らく『千萬人といへども吾れ往かん』の氣概あらざるべからず。